
モノクロームな風景

夢追い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロームな風景

【Nコード】

N8235X

【作者名】

夢追い人

【あらすじ】

恋愛に不器用な幸一が大学生になり、京都で一人暮らしをしている。偶然、祖母の宅に遊びに来ていた、高校時代に別れた真理に偶然出会う。昔話をした後、妹の秋子と一緒に住んでいると言う祖母の家に遊びに行くが、その夜から秋子が失踪してしまった。二人は秋子を探しながら、お互いに幼かった高校時代を振り返りながら、再び距離が近づいて行く。

一方、秋子はなぜ失踪したのか……。母親の過去とも絡みながら謎は深まっていく。

第一話 夕風になびくもの ―（前書き）

昭和の時代背景です。携帯電話もネットもありません。

第一話 夕風になびくもの 一

恋人達の佇む堤が、薄紫色の夕暮れにすっぱりと抱擁されてしまった。賀茂川の川面にも街の灯がとまり始めていた。昼間の蒸し暑さからは想像も出来ない程の涼やかな風が、川面に小波を立てながら、撫でるように川下へと吹き流れて行った。西の空はまだ明るく、山の淵が影絵のようにくっきりと浮かんでいる。

三浦幸一が京都のS大学に入学し、京都は西賀茂の学生アパートで独り暮らしを始めてから早くも一年半余りの歳月が流れていた。彼は今、二度目の夏休みを迎えている。夏休みだというのに別段やることもなく、毎日を自由気ままに、のんびんだらりと過ごしていた。夏休みの初期は、アパートの連中と一日中騒いで過ごしていたが、八月になると連中もみんな帰郷してしまった。

時代は平成に入って数年が過ぎ、学生生活にも変化が現れてきた。幸一のように、共同キッチン、共同トイレの学生アパートで集団生活をするものもいれば、学生マンションに住んでプライベートを大切にしている学生もかなり増えてきた。まだ、インターネットも携帯電話も普及していない時代であったが、一般加入電話が学生の各部屋に設置されていても、それほど贅沢だと責められる風潮では無くなっていた。

今日は一日中歴史小説を読んでいた。彼の部屋には扇風機どころか団扇もなかった。たった一つの救いは、窓向きの関係で直射日光が当たらないことと、賀茂川の辺にあるため、時々涼しい風が迷い込んでくることである。

日暮れ時になって涼しい風が吹き始めたようなので、部屋を出て足の向くままに歩き始めた。

アパートの玄関を出ると、そこはすぐに賀茂川の堤になっている。道路よりも数メートル下にある散策道まで土手を滑り降りて、スリッパの踵を引きずりながらぶらぶらと歩いた。

多くの恋人達の前を通り過ぎたが、別に羨ましいとも思わないし、自然と心に思い浮かんでくるような恋しい女もいなかった。強いて言えば、高校生の時に一度だけ恋愛の真似事をした穂積真理^{ほづみ まり}を懐かしく思い出す位であろうか……。しかし、それは彼女が懐かしいと言うよりは、波乱と刺激に富んだ高校生活そのものへの懐古なのかも知れなかった。

あの頃の生活に比べて、今の生活の余りに呑気なこと……。彼は柔らかな涼風に吹かれて、全身の不快要素をすべて抜き去られたような快感と安堵を覚えた。幸一はジーンズのポケットから手を出して、思い切り伸びをしてから深い呼吸をした。とても空気が旨い。やや強めの涼風が吹きつけた時、彼はひらりと風上に身体を向けて髪を風に洗う様にして空を仰いだ。このまま天国へでも吸い込まれてしまいそうな軽やかな快感であった。

風が弱くなつて、ほんの一瞬間の幻想的な世界にくるりと背を向けて再び現実の歩みを始めた刹那、彼の鼓動は止まり、彼が心は、現在と過去、現実と夢が織りなす綴れ織りの中を、光ほどの速さで駆け巡って行った。

真理がいる。幸一が心を完全燃焼させた穂積真理が、淡い薄紫の斜陽を受けて、短めの髪を夕風にもてあそばねながらゆつくりと歩んで来る。幸一の足は歩む術を忘れていた。呼吸すら忘れていた。どうにか鼓動が再活動を始めた時、今度は真理の動きが止まった。二つの肉体はまるでマネキン人形のようにその場に立ち尽くした。そして肉体を離れた魂は二年前の世界をさ迷い始めた。

「まさか……」

高校の卒業式の日、これが最後と自覚しながらも、声を掛けられずに遠くから見つめていた真理の姿が今、目の前にある。

「幸一さん……」

真理も幸一の名前を呼ぶのは二年ぶりであった。漸く二人は、万に一つの奇跡的な現実を認識して歩み寄った。

「あつ、そうか。幸一さんはS大やったわね」

真理は、あつさりとこの信じ難い出会いを受けとめて、幸一は女の順応能力の高さに今更ながら驚かされた。

「真理ちゃんはどうしてここに？」

幸一も彼女の名を自然と口にした。真理は昔の様に名を呼ばれた羞恥を、相変わらず深く透き通った瞳に漂わせた。

「母の実家が京都にあることは話したでしょう。夏休みやさかい遊びに来てゐるの。妹も今、祖母の家に住んで京都の大学に通つてるのよ」

と言つて真理は前髪をそつと掻きあげた。

「そうか」

幸一はぎこちなく二三歩進んでから、

「座るか」

と、空いているベンチを目で示した。彼女は柔らかに頷いてから彼の勧めに従つた。賀茂の流れも、カップルたちも、二人が再会する前とは何ら変化はなかった。

二人にとつては奇跡であつても、偶然の積み重ねで成立っている大宇宙から見れば、今の出会いなどは、どこにでも転がっているありふれた偶然でしかないであろうか……。幸一の心は、涼やかな自然の風に流されて、過去の思い出に遡つていった。

幸一は、姫路市にある第二高校に通う二年生であつた。穂積真理は同じく二年生で幸一とは隣のクラス。

穂積真理は学年でも有名な美少女で人柄も人気があつた。男子生徒の憧れは多いものの、どこか男を寄せ付けない雰囲気漂わせていた。だが、決して男子生徒に対して無愛想な訳でもなく、距離をおいている訳でもなく、むしろ愛想は良いし面倒見も良かった。彼氏がいるという噂は聞こえて来ないし、いつも女友達と一緒に遊んでいた。

幾人かの男子が彼女に交際を申し込んだという噂は聞こえてきたが、いずれも実らなかつたらしい。いつしか、真理は男子との交際に奥手で、あまり興味もないといった噂がまことしやかに聞こえて来た。

幸一が小耳にしたところでは、中学時代に男に裏切られて以来、男を信用出来なくなっているという、真偽の程は全くわからない風説までもが流れていた。

幸一が真理に興味を持ったのは、二年生の初夏の頃であった。一年生の頃から真理の噂はよく耳にしていたが、部活動のことしか頭になかった彼は、恋愛だの、女子だの、浮いた話題にあまり興味はなかった。

それが、修学旅行先で交わした一度の会話が契機となり、紆余曲折を経て年末に初デートをすることになった。大晦日の夜に書写山^{しよしゃざん}に登って除夜の鐘を聞き、初詣をしようと真理は企画していた。幸一はその夜の初デートのことを懐かしく思い起こしてみた。

『流れ星のほんの一瞬の軌跡が消えた後、漸く二人の白い息が同じ方向に広がった。』

「もうこれで三回目よ」

真理はやや不満気味に呟きながら、登山道から少し離れた所にある腰の高さ程の台形型の岩石に向かって歩いていった。若い男性のグループが足早に二人を追い抜いていった。

「君が叫んだ時にはもう消えてるよ。一緒に同じ流れ星を見るなんて絶対無理や」

幸一も、懐中電灯と薄い月明かりを頼りにしながら、彼女の真後ろに付いて歩を進めていた。

「少し休みましょう。幸一さんは運動部やさかい、私と歩いているとイライラしはるでしょ」

真理はそう言って台形岩の上部に腰を下ろした。正直なところ幸一は、普段の半分程の歩幅でゆっくりと歩いていた。しかも真理が時々つまずきそうになるので、いつも彼女の足元に気を取られていた。だから、彼女のように折節星空を見上げて、偶然流れ星を見つけることなど有り得なかった。然るに真理は、発見の都度驚嘆の声を発して幸一に方向を示すが、元より見えるはずもなかった。

「そんなことあらへん。ゆつくり歩くのも楽しいもんや。普段見えへんものまで見えてくる」

幸一は笑顔を浮かべて、彼女に気を遣わせないよう気配りをした。

「こんなに暗い道で何を見はったの？」

「小さな娘と歩くお父さんの気持ちかな」

そう言いながら、幸一も彼女の横に並んで腰掛けた。

「三浦君は優しいお父さんにならるわ」

からかい気味に言葉を放った真理が星空を見上げて、

「星がたくさん見えるわ！」

と、感嘆の声を上げて白い息を吐いた。幸一も漸くゆつくりと夜空を眺める機会を得た。確かに、自宅のベランダから見る星空よりも多くの星が視界に入ってきた。街灯りの影響を受けないためか、深い闇と、そこに浮かぶ星々の光源のコントラストによって、星空が三次元的に幸一に迫って来て、ぼんやり眺めていると宇宙へ吸い込まれてしまいそうであった。

「ほんときれいやわ……」

真理は再び感嘆の息を吐いた。

「俺は毎晩、うちのベランダで星を眺めているから珍しくはないけど、確かに街中で見るよりは断然綺麗や」

「毎晩見てはるの？夢見る少女みたいやね」

真理はそう言って、清々しい笑顔を月明かりの中でぼんやりと輝かせて、幸一の瞳を覗いた。幸一が初めて真理に惹かれたのはこの清々しい笑顔であった。

修学旅行で訪れた、上高地は梓川の辺で、さわさわとした新鮮な空気に溶け込み、透明な清流を背景にして、清々しく笑顔を浮かべる真理を目の当たりにした時、幸一は感動さえ覚えた。彼女は、澄んだ透明色が広がる自然の中で、清純な雰囲気を漂わせていた。その氷のように澄んだ情景が、今でも一枚の風景画となって、幸一の脳裏に大切に保存されていた。

「毎晩寝る前にね、星を眺めながら寝酒を引っ掛けて煙草を一服するんや」

「へえ、ロマン溢れる高校男子ね」

そう皮肉った真理は、笑みを浮かべてからハアッと、ゴジラのように白い息を吐いた。

修学旅行の際、河童橋付近で真理の笑顔を発見したものの、その後は見かける機会も、近づくチャンスもなかった。幸一は胸に熱い塊を抱えながらも、上高地散策という団体行動の中で、自然に彼女のことは忘れつつあった。一団が大正池に到着すると、しばらくの間自由行動となった。

幸一は、しばらくの間ふらふらと周囲を徘徊していたが、ふと目に留まった自然の倒木が、ちょうどいいベンチの態を呈していたので、そこに腰を下ろして、何の変化もない、退屈そうな池の面をぼんやりと眺めていた。

大正池の面はとても静かで、記念撮影云々で騒いでいる周囲の若者たちの喧騒など、すべてを吸収してしまって、まるで防音壁に囲まれた部屋のような不思議な静けさに、心まで吸い取られそうであった。

そんな、催眠術にでも掛かってしまいそうな心境のところへ、不意に後ろから女性の声が伝わってきた。

「三浦君、一人で何してはるの？」

ぼんやりと放心していた幸一は少々驚いて、寝ぼけたような瞳で後ろを振り返った。そこには、一年生の時に同じクラスで、テニス部である女子生徒がいたずらっぽく笑っていた。そして驚いたことに、その横には真理が微笑みを浮かべて立っていた。そう言えば、テニス部の彼女と真理は今と同じクラスで、仲が良いのか時々一緒に下校しているところを見掛けたことがあった。

「団体生活が苦手だね」

幸一はそう言つて、真理にも笑顔を送った。

「団体戦よりも個人戦が得意なものね」

テニス部の友人がそう言つて笑った。

「三浦君、テニス上手やね。この前の練習試合見てたんよ」

と、真理から驚く言葉が吐かれた。自然に名前を呼ばれたこと以上に、自分のことを知っていてくれたこと、しかも試合まで見ていてくれたことが、俄かには信じられない程嬉しかった。

学校での練習試合だったので、通りすがりに少し見てくれただけなのかも知れないが、それでも、幸一の心臓は破裂しそうな鼓動音を発していた。

真理の声は、顔の印象よりもやや大人びていた。わずかに鼻に掛かった響きが、微かに憂いと湿りとを漂わせていた。そんな響きが大人びて感じた訳なのかもしれない。

それから数分の間会話を続けた。初めての会話であるのに、特に自己紹介風のことは行わずに、まるで既知の間柄であるかのように自然に話すことが出来た。会話の中で『夏の大会頑張つてね』

と応援された。正直なところ、幸一は中学時代からテニスのために学校へ来ているような生徒であつたから、テニスの話題は嬉しかった。

一年生の時に個人戦で県内ベスト8に入ることが出来た。だから今年はベスト4以上というのが周囲の期待であり、自分の目標でもあつた。幸一は、真理が応援している前で目標を達成し『おめでとう』と言われる場面を秘かに想像して、益々闘志を燃やしていた。

「星を見ていたら悲しくならへん？」

岩の上で星空を見上げながら、修学旅行の記憶が星空のスクリーンに映し出されているかのように懐古の表情を浮かべて呟いた。

「センチメンタルな高校男子ね」

真理がからかい気味に幸一の瞳を覗いたが、彼は視線を真理には合わせずに、星空を見上げたままで深呼吸をした。

修学旅行の後、夏休みまでの期間は、まるで夢のように楽しく充実した期間であった。幸一と真理は、廊下などですれ違うと自然に挨拶を交わし、時には立話もした。幸一は次第に真理のことで心が一杯になり、昼も夜も彼女のことが自然と脳裏に浮かんでくるようになった。そうして、必ず目標を達成して真理に喜んでもらおうと、更に集中力を高めて練習に励んだ。

その頃から、自宅のベランダで星を見つめて真理のことを思い浮かべると、胸を絞られるような心細い切なさを感じ始めていた。幸い、真理に嫌われている訳でもなく、特別な関係になれる可能性が全く無い訳ではなかった。だから、切なくて悲しい気持ちにはなるが、暗い気持ちにはならなかった。

やがて夏休みに入り真理と会う機会が無くなって、すぐに大会が始まった。団体戦は早々と敗れ、個人戦は順調に勝ち進んでベスト16まで進むことが出来た。しかし、次の試合で幸一は戦えなくなった。試合中に怪我をしたのであった。幸一は周囲の期待にも、自分の目標にも、真理の笑顔にも届かなかった。

新学期に入っても、松葉杖を突いているうちは真理に会いたくはなかった。クラスの連中やテニス部のメンバーが慰めてくれるのはありがたいと感じたが、真理には慰められたくはなかったし、こんな惨めな姿を見せたくもなかった。もちろん、真理からわざわざ慰めに来るほどの仲でもなかったので、遠くから彼女を垣間見る以外に会う術は無かった。

その頃に見上げた星空は、悲しみを通り越して虚しさで自分への怒りしか無かった。周囲の何かのせいにしたい気持ちはあったが、結局はすべて自分の責めに舞い戻ってしまった。

松葉杖がとれてリハビリも終わり、日常生活に支障が無くなった頃には秋はとづくに過ぎ去って、紅葉が朽ち果てた冬に入っていた。

その頃には、真理と立話をする程度には心も回復していたが、テ

二入の話題を持ち出されることをどこかで恐れていた。だが、いつまでも中途半端な距離感が嫌で、思い切ってデートに誘ってみようかと考えてはみるが、どうせ受け入れられるはずがないと、自分で否定してしまうのが常だった。夏の怪我以来、何をするにも自信がなく、常に悪い結果を予測して動き出さない、情けない自分を克服することが出来なかった。

そうこうするうちに冬休みとなったが、まだテニスをやる気にはならなかった。

ある天気の良い日、突然、いつまでも行動できない自分に腹が立ち、思い切って真理に電話を掛けてみた。幸一は口から心臓が飛び出しそうなほど緊張して足が震えた。年始に初詣にでも行こうと誘ってみた。

『ごめんなさい』

やはり予想した通りの結末であった。年始は、まだ家族の予定が立たないという理由であった。では年末はと食い下がってみたが、忙しいからと断られてしまった。幸一は絶望のどん底に叩き落とされた。この数ヶ月間、色々辛い思いはしたが、唯一の希望は真理であった。例えわずかでも、親密な仲になれる可能性が残っていれば、遠くから眺めているだけでも幸せであったのに、そんな些細な幸福さえも自ら壊してしまった。

だらだらと冬休みを過ごしているうちに歳の瀬となった。世間も家の中も何かと騒がしくなり、幸一の居場所が無くなってきた。仕方なく、街にでも出掛けようとした時に電話が鳴った。真理からであった。年末の用事が済んで時間が空いたから、一緒に初詣に行こうと誘われた。実際、年末は忙しい様子であった。女子は、幸一のように家で惰眠をむさぼっている訳にもいかず、家事の手伝いで大変な様子であった。幸一は二つ返事で承諾して大晦日の夜を待ち焦がれていた。

「ごめんな」

唐突な幸一の言葉に、真理は小首を傾げて彼の横顔を見つめた。

「夏の大会で負けてしもて」

幸一はずっと胸に溜めていた、鉛の様に重い話題を持ち出した。

「何で三浦君が私に謝らはるの？私は何もしてないし、第一怪我しはったんやから仕方ないわ。ベスト16やってすごいことやと思うわ。私なんか何も得意なものあらへんのに、ほんまにすごいわ」

山の頂き辺りから除夜の鐘が響いてきた。幸一は真理に謝ることは的外れであることはわかっていたが、期待されていると勝手に思い込んでいた彼としては謝らないと気が済まないのも事実で、今漸くこの数ヶ月間溜まっていた不快なものが綺麗に流れ去って、除夜の鐘の音が素直に心に沁みてきた。

「せっかく応援してくれたのに、期待に応えられなかったさかい謝りたかっただけや」

「そう。お疲れ様でした。怪我が完全に治ったら、また頑張らばったらええやないの」

と言った瞬間、真理の表情は俄かに強ばって、

「ごめんなさい。そんな簡単にやり直せるものやないわね」

と、すぐに言葉を撤回した。幸一の表情が一瞬曇ったことを、真理は感じ取ったようであった。

幸一は街の灯りを見下ろした。大晦日だけあって多くの家庭の灯りが燈っていた。だがこんな田舎町では、星空の方が遥かに多くの灯を放っていた。

「君の言う通りや。何度でもやり直さなあかんのや」

除夜の鐘がまた一つ、奥深い星空に吸い込まれていった。

「さあ、もう一踏ん張りや。頑張って歩こうか」

幸一がさつと立ち上がって目で真理を促した。

「あつ」

今度は幸一が流れ星を発見したが真理は見逃した。

二人は登山道になっている六角坂参道ろっかくさかさんどうを登り切り、湯屋橋ゆやばしを渡った。多くの参拝者がダウンジャケットや厚手のコートに身を包んで、

家族や恋人や友人達と、日常とは違った時間を楽しんでいた。ここまで来ると、所々に電燈が燈り、懐中電灯は不要になった。はづき茶屋で温かい甘酒を飲んだ。正直なところ、幸一は寒くもないし疲れてもいなかった。むしろ、山道を歩いたので軽く汗ばむ位であった。しかし、真理が寒そうだったので温かいものを飲むことにした。もつとさつさと歩けば身体も温まるのにと、内心で真理に意見しながら甘い飲み物を口にした。

「いくつくらい鐘の音鳴った？」

真理の質問に驚いて、

「さあ、心地良い音やけど、数える気にはならへんなあ」

幸一はそう言いながらも、腕時計で鐘の音の間隔を測ってみた。

「鳴り始めたのが二十三時四十分頃やから、間隔の時間から考えて五十六くらいかな。今の鐘が五十七や」

「ほんまに？数学得意なの？」

真理は柔らかい上目使いで幸一をからかった。今届いてくる鐘の音は鐘楼に近いためか、山道で聞いた、星空に吸い込まれていくような響きとは違って、直接幸一の心の煩惱に響いてきた。

二人は店を出て魔尼堂まにどうに向かった。元禄元年に建立された魔尼堂は、参道よりも一段高い所に位置しており、長くて急な石段が伸びていた。下から見上げると、壮麗な舞台造りの木造の肌に、部分的に照明が反射して、優美で幽玄的な雰囲気漂わせていた。新年になると魔尼堂で護摩供が行われ、多くの人々が新年の祈願を掛けるらしい。

「あつ」

石段の真ん中辺りで、真理が突然叫んだ。

「また流れ星？」

「違うわよ。あと、五秒」

彼女は歩みを止めて腕時計を凝視している。

「明けておめでとう」

真理は、時計から離れた澄んだ瞳で幸一に微笑みかけた。幸一は、

その愛らしい表情にどきりとした。そして至福の感に満たされた。百八つ目の鐘の響きが、新年を迎えた参拝者全員の胸に希望の音色として響き渡った。

魔尼堂に着いた二人は手水所で手を洗い、口をすすいでから参列に加わった。礼拝前に手を洗うなど、幸一には初めての体験であった。線香の香りが漂う中で大勢の参拝客に揉まれながら、ゆつくりと参拝の列に従った。絵馬や御守り、線香や蠟燭など、運勢に関わりそうな物が諸々売られていた。

そろそろ二人の順番が近づいてきた。人込みの中で、真理が白いコートの内側に隠れたウエストポーチを探っている。財布を出そうとして手間取っていた。幸一が、ジーンズの左ポケットから小銭を一掴みして、彼女の前に差し出した。幸一のダウンジャケットは、腰までの長さであったので容易に取り出すことが出来た。真理は、幸一の手のひらにある何種類かの硬貨を見て一瞬躊躇したが、五百円硬貨をつまんでから幸一の瞳を覗きこみ、

「嘘よ」

と言って笑った。そして今度は、十円硬貨をつまんで再び幸一を覗いた。

「百円にしたら？」

という幸一の勧めに、真理は素直に従って、

「ありがとう」

そう言つて両手でその硬貨を包んだ。

「幸一さんは何をお祈りしてるの？」

幸一は、唐突に名前を呼ばれた驚きを表情に出さないように気を払いながら、

「俺は参拝なんかしないよ」

と言い放った。今度は真理が素直に驚いて、

「ほな、何しに来はったの？」

と、どうにも合点がいかない表情で、じっと幸一の反論を待った。

「真理ちゃんに会いにきた。話をしにきた」

幸一も、初めて彼女の名前を呼んでみた。一瞬、はにかんだ時間が二人の間に横たわったので、すぐさま幸一が、

「神様にお願ひしたところで運命なんて変わるものやないし、自分が努力もせずに、結果なんて得られるものやないと思う」

と、やや狼狽気味に言葉を発した。真理は軽く笑ってから、彼女の右側に立っている幸一の左腕にそつと自分の右手を添えて、

「幸一さんは強くて頼もしいわ」

と囁いた。ほんのわずかの間、二人の空間を線香の香りが通り過ぎて、心安らぐ平穏な気持ちが広がった。

「幸一さんは、自分の運命は自分で切り開く頼もしい人やけど、うちは……。私は家族の安全や幸せなんて、私の力で何とか出来るものや無いし、神様にお祈りすること位しか能がない女やの。そやさかい私が参拝する間待っててね」

幸一は、彼女の言葉に冷水を浴びせられたような衝撃を覚えた。

自分は家族の安全などに一切無関心であった。自分のことばかりを考えて過ごしてきた。自分の心の幅と、家族の幸福を案じる真理の心の広さを比較して、自分がひどく小さな人間であることを思い知らされた。

幸一は家族に対して愛情はあるが、この家族を大事にしようとか、将来こんな家庭を築こうとかいった思いは一切無かった。真理の言葉が、直感的には少々白々しく感じたが、ごく自然に語る彼女の表情を見ていると、真理が別世界の人間であるかのように感じられた。

二人の順番が来て、真理はそのまま拝殿に向かつて行つた。灯籠の灯りと提灯、蠟燭の橙色の光で、真理の白い肌が炎に照らされているかのようであった。線香の煙が白く浮かび上がった、神聖な気の満ちる空間に、真理がポカリと浮いているようであった。周囲の誰よりも若々しい美しさを放っていた。

幸一は列から外れて、真理の礼拝する姿を可愛いと思つて見つめていた。だが、真剣に祈願する彼女の姿は、彼にとって美しくはあるが、どこか馴染めない違和感があった。

「お待たせ」

清々しい笑顔で真理が小走りに近寄って来て、

「御神籤引きましょ」

と、明るく語尾を上げて、幸一の興味が湧かない提案を次々にしてきた。真理は幸一の気持ちなど聞く耳も持たない様子で、重い表情の彼を強引に導いた。

ここでも短い列が出来ていた。順番に木の筒を振っては中から番号の書かれた棒を引き出し、番号を告げて御神籤を受け取っていた。真理の順番が来た。彼女は無邪気な笑顔を浮かべて、小さな手に余る木の筒を、からからと何度も振ってから棒を引き抜いた。幸一は、筒を受け取るや否やあっさりと棒を取り出した。

「もつと集中しないと……」

「案外、あっさりとした方が結果は良かったりするもんや」

二人は早速灯籠の灯りの方へ歩み寄った。

「ほらな」

幸一は大吉であつた。

「うそ。何で？私は末吉やわ」

「でも確率的には大吉よりも末吉の方が低いらしいで」

「そういう問題やないの」

真理は御神籤の内容をじっくり読みながら淡白に答えた。

「これどうしたらええの？」

「大吉やし、持って帰らはつても、枝に結ばはつても構へんわ」

幸一はそばにある、白い御神籤の花がいっぱい咲いた冬枯れの枝に もう一つ花を添えた。

「ちゃんと読まな意味無いやないの。大吉とか凶とか、総合運だけで判断したらあかんのよ。中に書いてある事柄毎によく読んで、普段の生活の参考にするものなんよ」

そう言つて、真理はちらりと幸一を見やつたが、すぐに自分の御神籤を読むことに集中した。

「読んでも意味がわからん。古文苦手やしな。」

「今度、私が教えてあげるわ」

真理は片手間にそう答えておいてから、丁寧に御神籤を折り畳んでポシエットにしまい込んだ。

「持って帰るの？」

「本当は、凶が出た時にだけ結ぶものなんよ。悪運は持って帰りたくないさかい、神様をお願いするの。そやけど結ぶって行為は縁起がええさかい、みんな凶以外の御神籤も結んでいかはるけど」

「えらい詳しいなあ」

「小さい時から祖母と初詣に来ていたさかい、色々教えてもらったの。みんな祖母の受け売りよ」

そう言つて真理は照れくさそうに笑った。

「へえ、お祖母さんは物知りなんやな。で、なんて書いてあった？」

幸一は自分の御籤にも興味が無いのであるから、無論他人の物には全く興味は無かったが、会話の種に聞いてみた。

「内緒」

仕方なく幸一は、他の話題を見つけようと周囲を見渡した。

「一つだけ教えてあげる」

真理の勿体ぶった言葉に、反射的に拒否感を感じたが顔は微笑んでいた。

「恋愛運はね、障害が多いけどそれ乗り越えたら実るって書いてあったわ。幸一さんにもわかるように現代語訳してあげたのよ」

「障害を乗り越えたら実るなんて当たり前のこと、大吉も末吉も違いは無いのと違う？」

真理は笑顔だけ残して踵を返した。この後どうするのか幸一には段取りは無かった。真理が計画したことなので、彼女に従って行動するしかなかった。

二人は再び魔尼堂の石段を降りてから三つの堂の方へ歩み始めた。三つの堂は山奥の方へ進んで行くので、次第に明かりも少なくなり、再び懐中電灯が必要になってきた。

「幸一さんは兄弟いたはるの？」

「うん。妹が一人。まだ小学六年生やけど」

「へえ、優しいお兄ちゃんなんでしょうね、幸一さんは。私も一つ違いの妹がいるの」

真理は襟元についている白いファーに首を埋めるように肩をすばめて歩いてた。

「一つ違いなら、友達みたいなものやな」

幸一はジャケットのポケットに両手をつ込んで、足を擦りながらだらだらと歩いてた。

「そやさかい、細かなことでよく喧嘩もするわ。親にはいつも私が叱られるの。お姉ちゃんやからって。一つしか違わへんのに不公平やわ」

そう言つて、心持口を尖らせて拗ねた表情を浮かべた。幸一は話を聞くよりも彼女の拗ねた横顔を眺めている方が楽しかった。

二人は三つの堂の境内に足を踏み入れた。大講堂と常行堂じょうぎょうどうそして食堂じきやうどうがコの字型に配置されていて、その昔、弁慶が若い頃に修行をしていた場所でもあった。いくら大晦日とは言え三つの堂はすべて閉ざされていて特別な催しは無かった。いつもの夜の様子であった。そうしてどこにも人影は見当たらなかった。

「誰もおらへんわね。なんか怖いわ」

「他人がいる方が怖いやろう」

「隠れるところはいっぱいあるわ。床の下とか、お堂の裏とか。誰か隠れているかも？」

真理は幸一を怖がらせて喜んだ。そして、怖いと言った割にはすたすたと歩んで大講堂の石段を数段上がった。幸一も周囲を警戒しながらゆっくりと近づいた。くるりと振り向いた真理は、黙ったまま星空を見上げた。この境内はほとんど明りが無く、月明かりと懐中電灯の明かりだけがすべての光源であった。二人の持つ電灯がまるで蛍の光のように、この広い境内でばんやりと浮かんでいた。

「お父さんはどんな仕事したはるの？」

幸一は、深夜の外出を許す父親がどんな人間なのか、ヒントを得た

くて質問してみた。

「税理士の仕事。中小企業の税金の相談にのる仕事みたい。去年の夏から単身赴任で東京に行ったはるわ。東京に本社がある企業の仕事が忙しいらしいの。詳しいことはわからへんけど……」

「それだけ知っていたら十分や」

幸一は合点がいった。単身赴任で不在であるから、母親の判断だけで許されたのだろう。父親が側にいたら絶対許されない気がした。自分の妹が高校生になって、同じような行動を取るとしたら絶対に許さないだろうと自分では感じていたからだ。

「幸一さんとこのお父さんは？」

幸一は石段には上がらなかったから、真理の声がやや上から降りて来た。

「ごくありきたりの会社員で営業してるわ。いつも遅くまでがんばってくれている」

「へえ、感謝してはるんや、お父さんに」

真理は星空を見上げたまま、ひとり言の如く呟いた。

「感謝はしてるけどな……」

幸一は真暗な足元を見ながら呟いた。

「あんな風にはなりたくない？」

と、相変わらず、真理が星を目で追いながら呟いた。幸一は本音を言い当てられてどきりとしたが、足元を見続けながら腕組みをした。「男の子はそれで良いのよ。無意識のうちに父親を超えたいと思っている。だから感謝や尊敬の気持ちとは別に、どこかで認めたくない気持ちもある。認めてしまうと自分の目標レベルが具体的に見えて、自分の限界を見てしまうような気がするから……。そんな感じかな？可愛い少年くん」

と、真理がからかうように微笑んで、視線を星から幸一に落とした。

「真理ちゃんは歳をごまかしているやろ」

足元を見ていた幸一が真理を見上げた。

「失礼ね。心理学に興味があって少し勉強しただけよ」

二人は視線を合わせて笑い声を上げた。幸一は、真理への視線から方向を変えて夜空を隅々まで見渡した。

「あっ！」

唐突に幸一が叫んだ。

「何、流れ星？」

真理も慌てて星空を目で走査した。

「年賀状をポストに投函するのを忘れた」

真理はくすつと笑いを零してから、

「明日、自分で配らはったら？」

と言って今度は大きな笑い声を上げた。

幸一と真理は、暗闇にある三つの堂を後にして、ロープウェイ乗場のほうへと引き返した。

途中で小さな池があつて、二人は足を止めた。五メートル四方程の小さな池であつた。表面が凍りついていて、氷の下には数匹の錦鯉が、寒さに堪えるかのようにじっと身を寄せて浮遊していた。

「寒いなら、もっと動かはったら温まるのに」

さっきの茶屋で、幸一が真理に対して思ったことを、彼女が錦鯉に向かって言っている様が可笑しくて、彼は心の端で静かに笑った。

ロープウェイ駅の前に芝生の広場があつて、そこに直径が五メートルくらいの浅い穴を掘って焚火をしていた。他にもドラム缶で三つ四つの焚火があつた。それぞれの炎の周囲には、初日の出を待つ人々が暖を取っていた。地面に穴を掘った一番大きな焚火の周囲にはベンチが集めてあつた。

二人はそのベンチに腰を降ろして、メラメラと赤外線熱を発散している焚火の高揚を眺めていた。炎からは二、三メートル離れてはいるが十分に暖かった。その焚火の炎が真理の瞳の中で揺れていた。真理はじつと炎を見つめている。魔尼堂で、真理の肌に反射していた灯りよりも、より原始的で力強い炎の灯りが、再び真理の白い肌を妖艶な輝きに染めていた。炎の灯りを正面に受けているために、光陰の差がくつきりと映し出されて、彫りの深い彼女の顔立

ちが、より一層深く強調されていた。暖かく力強い灯りに作られた濃い影は艶美にうごめいて、真理の肌から滲んでいる艶の気を反面から強調した。

人々は一様に静かであった。じつと炎を見つめ、在る者は酒を飲み、在る者は煙草を吸い、コーヒーをすすり、人工の灯りがほとんど無いこの広場で、人間としての、動物としての本能に触れているかの如くであった。真理も同様に、まるで催眠術にでもかかった者のように炎に魅入られていた。

「人間は火を使うようになって文明が進歩したらしい」

幸一が、テレビで得た情報を披露してみた。その言葉を聞いて催眠術にかかっていたかも知れない真理が、

「他の動物は火を恐れるのに人間は恐れなかった。こうやってじつと炎を見つめていると、心が安らぐのはどうしてやるうね？人間も動物なら、本能的に恐れても良さそうなもののやのに」

と、実に全うな意見を述べた。幸一は少しの間真剣に考えてみたが答えが見つからなかったので、

「狩をしていた頃から、炎が家族団欒の中心やったんやろう。恐れていた頃の記憶を掻き消すほど、家族の中心は温かいものなのかも知れへんな」

と、何の根拠も無い憶測で答えた。不意に炎がはじけて大きな音が破裂した。その音は山肌に響き渡った後、静かに消滅していった。

「失礼ですが、三浦先輩じゃないですか？」

幸一の遺伝子の記憶ではなく、脳の記憶を刺激する、甘みを帯びた繊細な声が彼の背後で響いた。幸一が振り向くのと同時に真理も幻想から覚めて、現実を把握出来ない表情で周囲の様子を一つずつ認識していった。

「美紀か？久しぶり！どうしてたんや？」

幸一は、唐突に変化した周辺情報を整理できずに、目の前にある劇的な現象にのみ対処していた。

「やっぱり、三浦さんでしたか。本当、お久しぶりです。お元気で

したか？あ、彼女さんですか？」

美紀と呼ばれた少女は、幸一の横で事態の行方を見守ることしか出来ない真理のことを確認した。幸一が、彼女という言葉に一瞬躊躇して回答しあぐねた瞬間に、

「ええ、穂積真理と申します」

と、真理が幸一を驚かす挨拶をした。真理が自ら自分の彼女であると公言してくれたことには感動したが、今はその余韻に浸る余裕はなかった。

第一話 夕風になびくもの 二（前書き）

回想のなか。真理と美紀の二人と心を通わせていた幸一は、とうとう覚悟を決めて美紀と別れる。しかし幸一の行動を誤解して真理が失踪。彼女をを探す中で妹の秋子のピュアな魅力に惹かれる幸一だった。

第一話 夕風になびくもの 二

「中学時代のテニス部の後輩で早川美紀はやかわ みきさんです」

幸一は美紀を真理に紹介した。

「すみません、お二人の時間を邪魔してしまつて」

「いえ、いいのよ。縄文時代の話しをしていただけたやから。どうぞこつちに来て座つて頂戴」

真理はそう言つてベンチの端にずれて、幸一との間に間隔を空けた。
「じゃあ、少しだけお邪魔します」

美紀は、ハイネックの白っぽいセーターの上に革風の紅いジャンパーを着ていた。二人の間に腰掛ける時に、黒いジーンズが幸一の目に入つた。暗いから黒く見えただけで実は濃紺かも知れない。心が動揺している割にはどうでもいいことが幸一の気に止まつた。

「君は一人で来たの？」

幸一は色々と聞きたいことが頭の中で洪水のように押寄せて来たが、まず現状を確認することから始めた。

「いいえ。兄と一緒にです。正確に言えば、兄と、兄の彼女と三人です。毎年大晦日は、兄とここへ初詣に来る習慣になつていて、今年は彼女がいるから遠慮すると言つたけど、二人が許さなくて……。で、一応気を遣つて、時々は二人だけの時間を作つてあげている訳です」

「そう、気を遣う立場だね。でも一人でうろつくと危ないよ」

「幸一さんみたいな人がいるから？」

真理がいきなり口を挟んできた。美紀はくすりと笑つてから、
「大丈夫ですよ、三浦さんは……。三浦さんは実のところ女嫌いで
すから。それに兄達はあそこの焚火にいますしね」

と言つて真理に笑顔を送つた。

「へえ、幸一さんが女嫌いやとは知らなかったわ。男が好きなの？」
今度は、真理が美紀に笑顔を送つた。幸一は、二人の女が仲良くで

きる雰囲気がり立ったことは嬉しかったが、速く次の質問がしたくて、つい会話の流れを無視してしまった。

「学校はどこへいつているの？」

美紀は幸一より一つ年下であった。

「第三高校です」

「何年生？」

真理が再び口を挟んできた。

「俺たちは高校二年生。美紀は俺の後輩で高校生ということとは？」

幸一は少々小馬鹿にしたような口調で真理に問うた。

「一年生。私の妹と同じやわ」

クイズの正解がわかったような明るい口調で真理が答えた。

「え、そうなんですか」

美紀も真理に調子を合わせるような明るい語気で会話した。

幸一は、この手の女の会話についていけなかった。見ず知らずの女と妹が同じ年であったからといって、そんなに驚いて共鳴することはないだろうに……。

美紀は中学三年の時に突然転校した。幸一は中学時代、姫路市の中心街から西の方へバスで三十分位の所に住んでいたが、高校一年の春に隣の市に引っ越した。中学卒業後もテニス部の後輩指導で何度か中学を訪問したが、その時にはもう美紀はいなかった。転校をしたという事実は聞き出せたが、男子部員には詳しい住所まで知る者はいなかった。

真理と美紀が並んで座っている姿はまるで姉妹のようであった。炎の橙色の灯りが、二人の表情を神秘的で妖美な美しさに仕立てていた。光陰の境目がくつきりとして、エキゾチックな雰囲気を漂わせていたので、話をしてこの雰囲気を壊すのが憚られたが、美紀の情報を収集したい欲望は抑えられなかった。

「まだテニスを続けてるの？」

幸一は美紀の横顔に尋ねた。

「はい。相変わらず下手ですけど。三浦さんは怪我をされたんです

ね、残念でした。去年はベスト8まで進まれたのでしょ、すごいですね」

幸一は、美紀が離れていても自分の情報を知ってくれたことに感動を覚えて、急に熱い思いが胸の中で膨張していった。

「もう続けるのは無理かな」

幸一が真意を含んだ語気で静かに語った。美紀の驚いた表情の向こうに、心配そうな真理の表情が炎の灯りに浮いていた。

「そうですか……」

美紀はあっさりと表情を戻したが、真理は幸一の本心を探るように彼の瞳を見つめていた。

「私、そろそろ失礼します。兄が心配するので」

「一度ゆっくり話そうよ」

幸一の言葉に美紀は微笑んでから真理の方に視線を移した。

「構いませんか？」

と、真理に向かって少し小首を傾げて美紀が尋ねた。

「ええ、どうぞ。相手してあげて頂戴」

美紀はにつこり笑ってから二人に挨拶をして、小走りに去って行った。美紀が去った後の心の空虚に真理の温かい笑みが入ってきて、幸一はやや興奮し過ぎた自分に羞恥を覚えた。

「可愛い人ね」

真理の普段通りの声にやや落ち着きを取り戻した幸一は、

「ごめんな、久しぶりに会ったんで、つい興奮してしまつて……」と照れくさそうに謝った。

「いいわよ、気にせんという。幸一さんは美紀さんのこと好きやつたんでしょ？」

真理の突然の追求に彼が窮して固まっていると、真理はくすつと笑つて、

「幸一さんてほんまにわかりやすいわ」

と、優しい口調で幸一の緊張をほぐした。彼女の横顔に炎の灯りが艶めかしく揺れた。

「ねえ、美紀ちゃんとのこと聞かせて」

真理が、座る位置を幸一の方にずらせて身体を寄せてきた。

「もう昔の話しや」

「だったら、余計話せるやないの。ねえねえ」

真理は幸一の腕を掴んで揺すり始めた。そんなに他人の恋愛話を聞きたいものなのか不思議でなかったが、時間もたつぷりあるし、縄文時代の話題も発展しそうにないので、仕方なくぽつりぽつりと語り始めた。

幸一が美紀と出会ったのは、幸一が中学三年生に、美紀が二年生になる直前の春休みであった。春休中のある日、部活の後で幸一は、野球部のグラウンド縁にあるベンチに腰掛けて、野球部の練習試合を観戦していた。暖かい春の正午過ぎで空腹であったが、練習の疲れと春の陽気であうとうと眠気を覚えていた。

「野球がお好きなんですか？」

眠りかけた幸一がどきりとして声の持ち主を探すと、白いテニスウェアを着た美紀が眩しく立っていた。白いウェアが眩しいのか、美紀の笑顔が眩しいのか一瞬当惑したが、すぐさま平静を取り戻して「今投げているエースが友人でね、どの程度の実力が観てやろうと思ってる」

そう言いながら、目の前にいるテニス部らしい女子の名前を思い出そうとしたが無理であった。そもそも最初から知らなかった。女子のテニス部は人気があつて大人数だったので、名前どころか顔も覚えられなかった。

「早川美紀、新二年生です」

そう言った彼女は幸一の横に腰掛けた。まだ練習をする積りなのかラケットを持っていた。

「三浦幸一です。新三年生です」

「知ってますよ。三浦先輩は有名ですから」

「そう。男子は人数が少ないからな」

幸一が、美紀の可憐さに動揺した心を落着かせようとした時、わっ

と歓声が起きて、打球がレフト前に勢い良く転がって行った。

「打たれましたね」

「まだストレートしか投げられないそうだよ」

「へえ、そうなんですか。変化球は難しいんでしょうね」

美紀はそう応えながらエースの方をじっと見ていたが、野球には余り興味が無さそうな目をしていた。

「野球はのんびり観戦出来るからいいですね。テニスは集中して見えないといけないので疲れます」

幸一が、そんな言葉に釣られて愛らしい美紀の横顔をもう一度見つめた時、金属バットの音が鈍く響いた。

「また打たれましたね」

「スピードはあるけど球種がストレートだけじゃ辛いね。いくらコースをうまく突いても、タイミングがみんな同じだから合わせやすい。カーブも練習はしているみたいだけど」

「三浦さん、プロ野球の解説者みたいですね」

そう言った美紀の白い笑顔が春の陽気に照らされて、満開の桜のような華やかさを醸し出していた。

幸一が、突然現れた美紀の可愛さに心を奪われていた時、審判の大きな声がしてバッターが三振となった。

「今のボール落ちませんでした？」

二人は一塁側から見ていたので縦の変化はよく見えた。

「彼のカーブは曲がらないけど落ちるって自慢していた」

「落ちれば十分じゃないですか」

「それが毎回落ちるとは限らないらしい」

「落ちなかったらどうなるんですか？」

「手頃なスピードのストレートとなって、さっきみたいにクリーンヒットされる」

「カーブを投げるのにも勇気がいりますね」

そんな他愛もない会話から二人の関係は始まった。幸一は春の陽気のためか、今までに経験したことのない、心の底がわくわくするよ

うな躍動感を覚えた。今までも同級生の女子と二人きりで会話することは時々あったが、こんなにも心が酔わされたのは初めてであった。

次第に美紀との距離は縮まっていった。放課後や部活の後などによく会話した。時間が合うと家路の途中まで一緒に帰ったり、休みの日には買い物に出掛けたり、公園で弁当を広げてランチをしたりした。

幸一は、美紀のことを好きであるという自覚はしていたが、元来がスポーツ馬鹿で、女子とどのように付き合うかなどの情報についてはほとんど興味が無く、少年向けの情報雑誌などもほとんど見たことが無かった。

秋も深まって冬の香りが近づいてきた頃から、だんだんと美紀と話す機会が少なくなってきた。三年生である幸一の部活は夏で終了したので、練習で会うことも無くなった。図書室で勉強しながら美紀が部活を終えるのを待つと一緒に帰ることもあったが、次第に美紀が幸一と会うことを避けるようになってきた。理由は良くわからなかったが、何か悪いことを言ったのかと思い、そのうちにゆっくりと話す機会を設けて聞き出そうと思っていた。しかし何度誘っても断られ、ついには学校で会っても無視されるまでになった。当然幸一は深い悲しみに苛まれ、美紀の不可解な態度に身悶えして苦悩した。だが、結局は仲直りすることもなく、嫌われた原因さえも明確にならないまま卒業し、間もなく幸一は故郷を離れた。

「ちゃんと告白したの？」

真理が一通り幸一の話しを聞き終えてから質問した。

「そんなことするわけがない」

「何で？」

「あの頃は愛だの恋だのと言うことが嫌いだった。照れくさかったのかも知れへんな。男がそんな浮ついた言葉を口にするもんやないって本気で考えていた。硬派な男に憧れていたんや」

「可愛い中学生」

真理はそう茶化してから幸一の頬を人差し指で突いた。

「ましてや、自分を慕ってくれる後輩に、恋心を抱くなんて不謹慎
やと思っていたし、実際に抵抗があった」

「幸一さんはいつたい何時の時代の人？縄文時代？最早理解不能や
わ」

真理は笑いを通り越えて呆れ顔になっていた。幸一も、炎から視線
を外して彼女の瞳に炎が映っている様を見つめながら、苦笑いを浮
かべた。

「自分でもそう思う。多分それまでは女子に興味が無かったんや。
テニスばかりしてたから、どう対応するのかわからなかった」

「それで美紀ちゃんは、幸一さんのことを女嫌いやって言わはった
んやね。納得したわ。今の幸一さんからは想像もできひんけど」

真理は幸一の頬を軽くつねりながら、まるで小学生でもあやすよう
な柔らかな笑顔で幸一に語りかけた。

「でも、その割にはちゃっかりデートしたはるやないの」
と、今度は幸一の鼻を摘みながら指摘した。

「美紀に誘われるがままに従っていただけや」
「なるほどね」

真理は幸一の顔で遊ぶのをやめて、寒空に立ち昇る煙を目で追って
から、

「美紀ちゃんはまだ幸一さんのこと好いたはるわ」

と、幸一に横顔を向けたままで呟いた。幸一も、今夜何度も見上げ
た星空に視線を移してから、

「俺の話を聞いていた？秋頃から完全に無視され続けたんやで」
と、顎を突き出して星を仰いだままで呟いた。

「好きやから、一時的に嫌いになることもあるんよ」
「それこそ理解不能や」

幸一は、女心の不思議さや、掴みどころのないことを主張する意見
には一切興味がなかった。どんなに真剣に聞いても理解出来ないし、
最後には腹立ちを覚えるからであった。

「そうやね、幸一さんにはまだ難しいわ。もう少し大人にならばつたらわかるわ」

そう言つて真理は幸一の手を握った。

「温かいわ」

「君の手が冷たいんや」

幸一は真理に手を握られて少々動揺した。真理の手は小さかった。

こんな小さな手だと生活が不便じゃないかと、今の状況とは全く無縁な疑問が頭の片隅に浮かんた。

「理解は無理でもいいけど、女の私が言うからほぼ間違いないわよ。美紀ちゃんは、今でも幸一さんのことを好いてはる。どう、嬉しい？」

真理は、優しく幸一の表情を覗き込むようにして反応を待った。

「そりゃあ人に好かれるというのは嬉しいことや」

「あほ。こういう時は、美紀のことはもう関係ないとか、君の方が好きやとか、嘘でもいいから言うものよ」

そう言つて真理は幸一の手の甲を強くつねった。

唐突に強風が走り寄つて、焚火の炎を大きく沸きかえらせた。バチバチという薪のはじける音が大きく響き、小さな火の子が花火のようになら舞上った。

「真理ちゃんのことが一番好きや」

幸一は、ひと際熱い風を正面に受けながら、真理の手を強く握った。舞上った火の子が自然に消えて、再び静かな炎に戻るまでの数秒間、二人の呼吸は止まっていた。星の瞬きも、人々の拳動も、すべてが止まっているように二人は感じた。

「うちも好きよ」

真理はじつと炎の波を凝視しながら、両手で幸一の右手を包み込んで、頭を彼の肩に預けた。大きく揺れる炎の灯りが真理の色白い肌を橙色に染めて、鼻の陰影が頬の上で大きく揺れていた。

この原始的で神秘的な雰囲気の中で、二人は無言で心を確かめ合つた。二人は身体が触れることで、そこから互いの愛情が交わるよう

な感覚を覚えた』

「お婆さんの家はどこにあるの？」

記憶の旅から戻った幸一は、雪のように白い、真理の横顔と再会して、胸を搾られるような熱い塊が、身体中を駆巡るのを実感した。

全く変わりなかった。二年前の彼女とも、幸一が時折思い起そうとする時の幻想的な彼女とも……。

相変わらずの、清純な笑顔を浮かべている真理は、幸一の中で凝固していた過去の感情を溶解させ始めた。

「上賀茂橋を少し下がった辺りよ。菖蒲園町いう所やけど知ってはる？」

「ああ、知ってる。バイトへ行く時によく通るさかい」

「幸一さんのところは？」

「あそこや」

幸一の指差す方向を振り返る瞬間の、まだ幼い仕草がスロー動画のように彼の瞳に映った。どこからか、夏草の蒸せるような香りが漂って来て、彼を故郷の思い出に誘った。

「いつから京都に来てはるの？」

幸一は川向こうでジョギングする若者を目で追いながら尋ねた。

「一昨日からよ」

「いつまでいる予定？」

「さあ、特に予定はしてへんわ」

真理はそう答えて、やや不器用な笑顔を浮かべた。話し相手を深く見つめる癖も相変わらずであった。その瞳の純粹さに思わず視線を外してしまいそうになるのは、自分に何か負い目があるのかと自問してみるのが常であった。

「もう星が出ているわ。あれが一番星かなあ」

空を仰いだ真理の幼い表情に心惑わされながら、彼女の視線を追った幸一は、夕風に運ばれた真理の甘い香りに、時の経過を実感した。「高校時代にも一緒に星眺めたなあ」

「ええ、大晦日の夜やったわね」

真理は過去の星を眺めるかのように、二年や三年では微塵たりと変化しようとしないう大宇宙を見つめている。

「書写山の坂の途中で、岩の上に腰掛けて」

幸一も、真理と同じ過去の星を見つめた。

「まだ、哀しくならはるの？星眺めはつたら……」

あの時の言葉を持ち出して、真理はからかうような笑顔で彼の瞳を覗き込んだ。

「もう一回あったよな、一緒に星を眺めたこと」

二人が数分前に再会した瞬間から、何時、この話題に触れようと、互いに模索しているように幸一は感じていた。

初めてのデートで真理と心を交わしたものの、美紀と出会ったことで、美紀に相手にされなかった期間、過去にばかりと空いてしまった空間を埋めるチャンスを得た幸一は、約二ヶ月間、真理と付き合いながらも、美紀と頻繁に会っていた。休日には、むしろ美紀と会うことの方が多かった。

幸一は、真理が自分の行動に理解を示してくれていることに甘え過ぎていることも自覚していた。そしてある日、真理とのデートで幸一は覚悟を決めた。

「三月を迎えたものの、二人に吹く風はまだ冷たかった。今日は久しぶりに真理と出掛けていた。彼女は、淡いピンクの薄手のセーターに、カーキ色のブルゾンをまとっている。膝上丈の淡い水色のスカートを着いていた。ヒールが高めのパンプスを履いていたので普段より背が高くなっていた。

幸一は、しとやかに公園のベンチに座っている真理の横に並んで腰掛けた。そうして彼女の横顔をさりげなく見つめた。今日も薄化粧をしていた。

「嫌な思いをさせてごめん」

幸一はずつと負い目を感じていたことを口にした。例え中学時代の

後輩とはいえ、何度も二人きりで会うことは、真理にとって面白くない。ましてこの二ヶ月間、休日には一度も会えずに、その間幸一はずっと美紀と会っていたのだから、余程のお人好しでも怒って然るべきであろう。

「いいのよ、何も気にしてへんさかい。幸一さんは会いたい人と会わはつたらええのよ」

真理は幸一の方を向いて自然な笑顔を浮かべてから、すぐに梅林の方へ目線を戻した。

今日は電車に乗って、姫路の西隣にある御津町の梅林公園に来ていた。海岸縁にある小高い丘にある公園で、梅林の向こうには瀬戸内海の静かな波が見えた。

「そうか」

幸一はポツリと呟いてから、真理と同じように梅林とその背景に広がる瀬戸内海をぼんやり眺めた。

幸一は、真理の親しい女友達から苦言を呈されたことを思い出した。真理は平気な態度でいるけれど、本当は幸一の気持ち揺らいでいるのではないかと不安で仕方がないそうだ。この手の女友達のお節介情報は、多分に大げさで間違いが多く、いわゆる親友の私見になり織り込まれているもので、すべてを信用するわけにはいかないが、真理が幸一の心を信用しきれなくなるのは至極当然のことである。心がいった。

だから、この段になってもまだ平気そうに可憐な笑顔を浮かべる真理が意地らしくもあり、いわゆる親友の情報に、混ざり物が多かったのかと疑ってしまうほど真理の笑顔は自然であった。

「泣いたらしいな」

いわゆる親友の情報だが、真理は不安と嫉妬に堪りかねて、親友の前で涙したらしい。

「嫌やわ、あの子そんなこと話さはったの？」

幸一は梅を眺めたまま軽く微笑んだ。しかし、真理は幸一の反応など気にも留めずにふいと立ち上がった。

二人は梅林公園の中の休憩所で雨宿りをしていた。休憩所といっても、ベンチとテーブルが二組設置されて、茅葺をあしらった軽量サツシの屋根があるだけで、雨や厳しい日差しを避けるだけの簡易な休憩所であった。天気が良ければ、ここでお弁当を広げて楽しめる自然の中の団欒場所でもあった。

今日一日、何とか持つかもしれないと期待していた天気が崩れて、昼過ぎからは、霧のような春雨が辺りを湿らせていた。観光客もまばらで、周囲のすべての音を、霧の春雨が吸い尽くしているかのようになりに静寂が広がっていた。風はまだ冷たいものの、既に春の匂いを含んだ風であった。

真理は、霧春雨の幕の前にして立ち尽くしていた。あと一歩踏み出せば霧を浴びる位置に立って、潮と、芳しい梅の香りが混ざった、肌寒い風に髪を流されながらブルゾンの前をゆくりと閉じた。

「女の泣なんかに動揺しはったらあかんわよ。女の泣なんて、理由が有って無いようなもの。これからの男の人生の参考にして頂戴」そう言つて、真理は大人びた笑みを浮かべて幸一に振向いた。そしてすぐにまた海に向き直って立ち尽くした。梅の花は八分くらい開花している様子であった。瀬戸内海も濃いグレーに染まっていて、海らしい青さはどこにも無かった。空の曇った色彩が海に映えているような憂鬱な風景が漂い、波の音は湿気に吸収されてしまったのか、ここまで届いては来なかった。

真理は霧雨の境界線に立つことで、霧に包まれた広大な自然を背景にする結果となった。幸一から見ると、しんしんと降り続ける雪の優しさに似た霧春雨の、紅梅白梅に柔らかく覆いかぶさる風景が、彼の視界一杯に展開し、その奥には静かに舞う瀬戸内の波があった。そんな、静寂で、綿々と営みを続ける自然の雄大な背景に、しとやかな真理が溶け込んでいた。

「そやけど嬉しいわ。今日は幸一さんと一緒にいられて」唐突に振り返った真理が、霧が、木の葉を濡らしていく風景のような柔らかな声で心根を言い表した。真理の華奢な身体は、冷たい春

雨をただじつと受入れる梅が枝の如く、健気で可憐であった。

「俺のことを信用出来なかった？」

幸一は会話を元に戻した。

「信用はしてるわよ、あほ。不安なだけ、幸一さんの結論が……」

「俺の結論は何？」

「いけずやわあ」

真理は目元に笑みを浮かべながら、幸一に数歩歩み寄った。幸一は思わず立ち上がってぐいつと伸びをした。このままでは可憐な真理を抱き締めてしまいそうであった。

幸一は、さりげなく真理をかわして霧のカーテンの手前まで数歩歩んだ。真理は幸一と入替わるようにしてしばらくは椅子に腰掛けていたが、鶯の声がどこからともなく響いてくると再び立ち上がって、瀬戸内海に向かって腕組みをしている幸一の横に並んだ。

真理は幸一の側にはいても、腕や肩に接触して肌を寄せるようなことはしなかった。幸一も、肌を触れたいとは思わなかったが、肩が触れ合う程の微妙な距離感に、焚火の前で手を握り合った時の動物的な感触を懐かしく思い出した。

「ごめんな、あほで」

幸一はそう言つて、今度はテーブルに飛び乗って腰掛けた。真理は幸一には従わずにそのまま海を見つめていた。幸一は真理の後ろ姿がふと目に留まった。ハイヒールで腰の高さがやや高くなった彼女の色気を感じながらも、なぜか女性の後姿には哀れを感じる自分が不思議であった。

「美紀とは君が心配するような仲やないよ。可愛い後輩でしかない。俺が高校一年の時に今の家に引っ越した。その後美紀も引っ越して、しばらく連絡が途絶えていた。そやから色々と積もる話があっただけや。あ、もう何度も話したな」

真理は背中で幸一の言葉を聞いている。

「でも、もう美紀と二人きりでは会わへんよ」

幸一の言葉に静かに振向いた真理は、怪訝そうな瞳で幸一を伺ったが、霧雨のためか、睫毛から瞳まで、薄く濡れているようであった。幸一は、この二ヶ月間美紀と会うことで、ばかりと空いた美紀との空間をある程度埋めることが出来て満足し始めていた。美紀も過去のいろいろな思い出話や、最近の失恋話などを幸一と交わして、ある程度満足しているようであった。

しかし、幸一が決心した最も大きな理由は、これ以上美紀と会い続けると、中学時代に超えられなかった壁を越えたいという欲望が芽生えてきたからであった。

要するに、懐かしさだけで美紀と会っていた頃は、真理に負い目を感じることには無かったが、美紀のことを再び好きになり始めてしまっている自分を発見して、急に引け目を感じ始めたのであった。

「何で？何でもう会わはらへんの？」

真理が身体ごと幸一に振向いた。

「お互いに昔の話は大方話し尽くした。美紀も話したいことはすべて話したみたいやし。これからはクラブのOB会とか、友達同士で会うとかして、たまに話が出来たら十分や」

「ほんまに？」

思わず真理が近づいてきて幸一の横に腰掛けた。そして幸一の瞳をじっと見つめて、

「ほんまに、ほんま？」

と、切羽詰ったような声で幸一の心を揺さぶった。真理の睫毛に水滴が乗っていた。

「ほんまや」

幸一もじつと真理の瞳を見つめて心から誓った。

「じゃあ、信じます。絶対よ。今度二人きりで会わはったら……うち……うち死んでしまうから」

と、物騒な言葉を吐いて、やや涙目になった目尻を小指でさっと拭いた。幸一は、真理の健気さがこの上なく可愛いと感じた。

「死ぬなんて物騒なこと言うなよ」

幸一はそう言って真理の頭を軽く撫でた。

「ごめん」

真理はそう呟いて俯いたが、彼女の頭を撫でている幸一の手を取って自分の膝の上に置き、両手で彼の手を握った。そうしてそのまま、霧の向こうに浮かぶ瀬戸内の島影に視線を合わせた。幸一も同じように黙したままで、ゆっくり移動する船影を見つめていた。

湿った梅花の、かぐわしい香りが、心を握り合った若い二人を優しく包み込んでいた。

幸一は今、自分と一緒に賀茂川のベンチに座っている真理と、霧に浮かんだ思い出の彼女とを比べてみた。そしてその複雑な思いを抱いたまま、約束どおりに美紀に別れを告げた時のことを思い出した。

実は、別れを告げるために美紀と二人きりで会うという軽はずみな行動が、幸一と真理の、その後の関係をおかしくしてしまったのだった。

『時折、桜の花びらが風に吹かれて散っていた。駅から十分程歩いた所に河川敷があり、そこに小さな公園があった。十数本の桜の木が植えてあり、子供用の遊具もあった。小さな子供連れの家族が数組、お弁当を広げて花見をしていた。子供達は声を限りに叫んで走り回っている。』

「可愛いですね、子供は」

「時と場合によるけどね」

美紀と幸一は、家族連れから距離を置いてブランコに腰を下ろしていた。

「そうか、三浦さんの妹さんはまだ小学生でしたね。可愛いですか？」

「時と場合によるね」

二人の頭上でも、満開の桜が、柔らかい日差しを嬉しそうに浴びていた。

「でも最近は生意気になってきてね、彼女は、俺を遊んであげていると思っっている節がある」

そう言つて、幸一は地面をトンと軽く蹴つて少し揺れてみたが、余り気持ちの良いものではなかった。どうして子供の頃は、こんな揺れが平気で楽しかったのだろうか。

「私も三浦さんを遊んであげていると思っっていますよ」

美紀はそう言つて春風のように優しく笑った。

「それはご親切に……。どうもありがとう」

幸一も軽く微笑んで、暖かな春風が吹く度にひらひらと舞い落ちてくる花びらが、美紀の頭に載らないものと目で追つてみた。真理には、どこか湿った大人の美しさがあつたが、美紀には、さらりとした明るさがあつた。真理には金木犀の香りと秋の夕暮れが似合うが、美紀には桜と春の陽気がぴつたり似合っていた。

幸一は、こんなに可愛い美紀と、ずっと良い友達でいたいと実感した。真理に約束してしまったことを若干後悔もした。だが、もうこれ以上、真理を傷つけることはしなくなかった。

「今日は何だか元気が無いですね？」

美紀も軽く地面を蹴った。二人は川に向かって前後に揺れた。

「そんなことないよ」

虚を突かれた幸一が、作り笑顔と明るい語調で誤魔化そうとした。

「穂積さんと喧嘩でもしたんですか？」

川面に小波を起こしている暖かな風が、幸一の胸をすり抜けて行った。

「いいや。仲良くしてるよ」

春の日差しは、川原にぎつしり群生する草の表皮にも反射して、まるで水滴が載っているかのようにきらきらと輝いていた。

「それは良かったです」

やっと桜の花びらが美紀の頭に載った。美紀は軽く目を閉じて、微

風の運ぶ春の香を味わうかのように深く呼吸した。

「でも……」

幸一は、そろそろ覚悟を決めなければならないと腹の中で自分を叱咤した。

「でも？」

美紀は目を閉じたままで春を楽しんでいる。

「最近、真理に悪いような気がしてきた」

「今頃ですか？そんなの最初から気にして下さいよ」

美紀は目を開けて、青空のキャンパスに、白と淡いピンクの花模様が描かれている様を見上げたが、その美しさは彼女の心には届いていないようであった。

「最初は問題なかった。でも最近は……。このままだと君のことを好きになつてしまいそうで……。だから負い目を感じ始めてきた」

幸一は、今日は本心を包み隠さずに話そうと決心していた。

美紀の頭から花びらが舞い落ちた。

「またカーブですか……。ずるいですね」

美紀が、ちらりと幸一の方を睨みつけるような表情を浮かべ、苛立ちの感情を彼にぶつけた。一瞬、凍りつくような冷たい驚きが胸中で小爆発した幸一は、相変わらずの青空を見上げて、一気に胸中を吐露しようと覚悟を決めた。

「実は、中学時代には自分の気持ちが良くわからなかったけど、今思うと、君のことが好きだったと思う。ただの後輩ではなくて女として。でも、なぜかそれを認めたくない自分がいて、一度もちゃんと気持ちを伝えられないまま、君に嫌われてしまった」

「嫌ってなんかいませんでしたよ」

今度は美紀の左肩に花びらが静かに舞い降りた。

「じゃあ、どうしてあんなに俺のことを無視したの？」

幸一にはもうどうでも良いことであったが、長い間の疑問でもあったので、思い切って質問をぶつけてみた。もつとも、本当のことを言ってくれるかどうかは疑問であった。

「鈍感だから」

そう言つて美紀はブランコから飛び降りて、川べりに数歩近寄つた所にある、丸太をモチーフにしたベンチに腰を下ろした。肩に載つていた花びらは、再び宙を舞つて着地した。

幸一も同じようにブランコから離れて、桜が枝の下にある丸太に美紀と並んだ。幸一には美紀の言葉の意味が理解できずに、もう少し彼女が言葉を発するのを待った。だが、美紀はなかなか次の言葉を発しなかった。彼女も気持ちを整理している様子であつた。

「私ね、中学一年生の時から三浦さんのことが好きでした。先輩としてではなくて男として。二年生になる時、三浦さんと初めてお話し出来て、それ以来、三浦さんも、どちらかと言うと私のことを好きでいて下さつたことは感じていました」

この公園は河口付近にあるので、時折潮の香りが流れて来た。

「三浦さんと、初めてお話しした時に見ていた野球の試合を覚えていますか？」

「ああ。俺の友達が投げていた」

「三浦さんはあのピッチャーみたいに直球を投げてくれませんでした。いつも変化球ばかりでとても疲れました」

人騒がせな疾風が、桜吹雪を吹き荒らしてから走り去つて行つた。

「落ちるカーブに曲がらないカーブだったな。でも、直球も何も、自分の気持ちをはつきりわからなかつたのだから、投げようがなかったけどね」

幸一はこんな風に言われたことは今まで一度も無かつたから、正直なところとても驚愕した。もしかしたら、真理も同様に感じているのだろうかと不安が走つた。

「だから三浦さんと離れてみようと思つて……。私も最初は辛かつたけど、一ヶ月もすると慣れてきました。そうしたら、男として好きだと思つていたけど、実は先輩として懂れていただけなのかも知れないと、疑問を感じ始めたんです」

「二人とも、同じような気持ちで、同じように迷っていたわけか」

幸一には自然に笑みが零れてきた。だが、美紀は川面の小波に視線を置いたままで微動だにしなかった。

「というのは、自分を誤魔化すためにつけた後付けの理由です。本当は、私が冷たくすれば、三浦さんが焦ってもう一步進んでくれるかも知れないと期待していたんです。少しだけ賭けを試みたくです。でも、三浦さんは進んでくれなかった。ストレートを投げてくれなかった。そうしたら何となく腹が立ってきて、少し嫌いになって。でも拗ねていただけなんです。いつか元に戻ろうと思っていたんですけど、時間が経てば経つほど戻り難くて……。しかも三浦さんは引越してしまった。とても後悔していたんですよ」

再び疾風が訪れて、地面に積もった花びらを舞い上げた。美紀は短いスカートの裾を少し直した。

『好きやから一時的に嫌いになることもあるんよ』

幸一は、焚火の前で聞いた真理の言葉を思い出した。真理の言った通りであった。彼は心の奥底で真理に感心した。

「君がそんな思いをしていたなんて全く気が付かなかった……」

幸一は、美紀が自分を避けるようにして、校舎の階段で、無言ですれ違った時の、身も凍りつくような冷たい思いが、心の記憶から蘇ってきて、折角の陽だまりで温まった心が底冷えしたようであった。「だから、三浦さんは鈍感だって言ったでしょ」

美紀は一瞬、自然な笑顔を浮かべたが、ふっと灯が消えたような表情に沈んでいった。

「もう会うのは止めにしましょう」

美紀が、その言葉の意味するところとは正反対に、明るい語気で提案したが、幸一には刹那の視線もくれずに、桜を見上げて深呼吸をした。それから漸く幸一に瞳を向けて、

「実は私も、何となく潮時かなって感じていたんです。いつまでも三浦さんや穂積さんに甘えてはいけなと思っていました。思い出話もたくさん出来たし、三浦さんのことも色々教えて頂いたのもう十分です」

と、あつさりとした口調で胸のうちを吐露した。

「それに、何度か三浦さんに遊んで頂いて、中学時代に失った時間を取り戻せたような気がしました。私が変な意地を張って失ってしまったものを、少しは取り戻せたような気がします」

そんな彼女の言葉を聞いていると、幸一は急に寂しさがこみ上げて来て、ほんの二ヶ月間の楽しかった思い出が、ただただ寂しい感情の波となって、彼の胸の中で飛沫をあげた。

幸一も美紀と同様に、あたかも中学時代に戻って、失った二人の時間を取り戻しているかのように実感していた。そしてこの二ヶ月の出来事は、美紀に避けられていた頃の寒い記憶の穴を塞いでくれたように感じる。美紀も同じ様な感覚であつたということは、幸一が感じた通り、二人で過去と現在を一緒に旅していたことになる。だが、確かに失った空間を埋められたような満足感はあるものの、美紀との関係においては中学時代と同様に中途半端な関係を築いただけであつて、あの頃から何も進歩してはいなかった。

『またカーブですか』

と、さつき美紀が口走った言葉の意味が漸く理解出来た。そして気付かされた。自分が既に美紀のことを好きになつていることを……。きっと美紀にも感じ取られているのであろう。それを、好きになつてしまふかも知れないなどと表現したから、またカーブなのかと言われたのだ。

「俺も、君と同じように過去の空虚な記憶を埋めていた。俺たちは同じことをしていたことになる」

幸一は、自分の反省点に関しては何も言わなかった。

「そうですか。でも、過去を埋めてみたところで、少々の満足感はありませんけど、何も変わりませんでしたね」

美紀はまたしても、幸一と同じ感想を述べた。

「二人で過去と現在を旅していただけだね」

「うまいこと言われますね。いつからそんなロマンチストになられたんですか？」

「昔から、敏感な感受性を備えたロマンチストだと思っていたけど」
幸一は、照れ笑いをしながら会話を少し茶化した。だが美紀は、悲しくなるほど春らしくて長閑な風景をぼんやりと眺めたまま、
「いずれにしても、もうお二人に迷惑をお掛けすることは出来ません」

と、強い口調で言い切った。幸一の心に氷の棘が刺さった。

「何も迷惑なんて掛かっていないよ。真理も全然気にしていないし」
幸一は暖かい日差しを受けながら、冷たい春雨の霧に浮かんだ真理の眼差しを脳裏に浮かべていた。

「そうですか。でも、三浦さんは鈍いから気が付いていないだけで、本当は穂積さん、嫌がっていると思いますよ」

幸一は、確かに自分は鈍いと感じた。真理の本当の気持ちを考えようとせず、彼女の思いやりの言葉を真に受けて、自分に都合の良いものだけを視界に入れてきた。

「鈍いのかなあ。昔から敏感な感受性を備えたロマンチストだと思っっているけど」

と、先ほど相手にされなかった冗談を再び吐いて、雰囲気やを和らげようと努めた。

「鈍感ですよ」

目の前を川が流れているためか、不意に梓川の清い流れと、清々しい清涼感のある気の香りが脳裏に浮かんできた。すると、

『美紀ちゃん、幸一さんのことを今でも好いてはる』

という、焚火の前での真理の言葉が、一本の火柱のように記憶から蘇った。そして戸惑った。

幸一は、今も鈍感だと言われているような気がしてきた。美紀が無理して別れようとしているのに、無理をしていることに全く気付かずにいることを鈍感だと言われているような気がした。

過去の空虚を埋めて満足だと言った、美紀の言葉を鵜呑みにしていることを鈍感だと言われているような気がした。

今でも幸一のことを好きだという気持ち、わかって欲しいと言

われているような気がした。

だが、自ら別れを言葉にして、平然としている美紀の隣にいと、どれも考え過ぎのような気もした。彼女はいつも真理のことに気を置き、迷惑を掛けないようにして過去の失敗を埋めようとしていた。

少しの間だけ、幸一とデートをして恋人気分を味わいたかっただけ。ただそれだけなのかも知れない。そう考える方が自然であるように思えてきた。

幸一はゆっくりと立ち上がった。別れは寂しいが、このまま一生会えない訳でもない。そうして、幸一にとっては一番の疑問であった、過去の経緯も明確になったし、当時言えなかった思いも、過去の言葉として伝えることが出来た。今更美紀の気持ちを色々推察してみても仕方の無いことであった。

「またOB会でもやろう」

幸一は大きく伸びをして、枝の隙間から青空を覗いた。もしかしたら、中学時代に言えなかったことを言いたくて、この二ヶ月間、美紀と接していたのではないかという思いが芽生えてきた。或いは、美紀が幸一のことを、突然避け始めた理由を聞くために接していたのかも知れない。

「そんなの行く訳が無いでしょう。どこまで鈍感なんですか！」

美紀が座ったままで幸一を睨みつけてから、

「どうして、たった一言を言ってくれないのですか？昔も今も、たった一言を……」

と叫んだが、最後は声になっていなかった。美紀の瞳から涙が溢れて、地面に咲いた桜の上に落ちていった。幸一は立ち尽くしたまま彼女の震える肩を見つめていた。

「ずっと待っていたのに。ほんの少しでも、私のことを好きでいて下さるなら、穂積さんへの愛情の百分の一でも愛して下さるのなら、言葉にして欲しい。どうすればわかって頂けるんですか……」

美紀は俯いたままで、涙を零しながら嗚咽した。

幸一は、再び彼女の横に腰を掛けて、嗚咽が止まるのをじっと待っていた。

『女の涙なんかに動揺しはったらあかんわよ』

真理の言葉が自然と思いい出されてきた。だが、幸一にはこの事態を放置することは出来なかった。しかし、いくら切望されたとはいえ、このタイミングで好きだと言っても白々しいだけで、却って失望させてしまう気がした。

十数分も経過しただろうか。漸く美紀の嗚咽が止まり、涙も止まった。いつの間にか風が強くなっていた。

「ごめんなさい。三浦さんとお別れすると思うと、気持ちが混乱したみたいです。今言ったことは忘れて下さい。三浦さんに一方的に期待ばかりして、自分は何もしていませんでした」

美紀は、涙の痕跡が残る瞳で幸一を見つめた。幸一もじっと美紀を見つめ返した。

「最初から私と言えば良かったんですね。三浦さんのことが好きですと。そして今も大好きです。愛しています。だから、穂積さんと幸せになつて下さい」

美紀の瞳に残っていた涙が、風に流されて、桜と共に宙を舞ったように見えた。

幸一は、美紀の途な表情を堪らなく可愛いと感じた。そして、過去の思い出ごと抱き締めるように、美紀の肩を抱き寄せた。美紀は、幸一に身を委ねて彼の胸に顔を埋めた。潮の香りが、少しの間漂っていたがすぐに流れていった。幸一の胸の鼓動が大きく響き、美紀にも聞こえているはずだった。

その鼓動が百も打った頃、美紀は意を決したように、暖かな寢床から抜け出る時のような未練を残して、静かに彼の胸から離れた。そうして、美紀が幸一を見上げた瞬間、幸一はそっと口づけをした。そのわずかの間に、二人の心は再び過去へと旅をした。過去に戻って心を開放しあった。正直に気持ちをぶつけ合った。二人の描いたすべての想い出を再び体験したような気がした。

「ありがとう」

旅から戻った美紀がにこりと笑った。

「口下手でごめん」

「やっと思いが叶いました。とても幸せな気持ちです。もう、お別れですけどね……。今日のことは一生忘れません」

そう言って美紀はすらりと立ち上がってから、

「いろいろお世話になりました。いつか二人とも大人になって、どこかでまた会えたらいいですね」

と言って、丁寧にお辞儀をした。そして、桜吹雪に包まれながら公園を抜けて、舞い乱れる桜に紛れて見えなくなっていった。美紀は、二度と幸一を振り返ることは無かった。そして幸一は美紀から一度も目を離すことは無かった」

幸一は、桜吹雪の中での別れを思い浮かべて、本来なら、この思っただけでも切なくて悲しい大事件であったのに、その後に真理が引き起こした事件のお陰で、その印象さえ薄くなってしまっていた。霧雨に覆われた梅林で、美紀とは二度と会わないと真理に約束した。厳密に言えば、幸一は約束を破ったことになるが、彼にすれば、きちんと説明して別れたかった。別れるために会ったから、別に構わないと思い込んでいたが、どうやら真理にはその論理は通じなかった。

あんな大騒動を起こした真理が、今、横に並んでいることが可笑しくもあった。幸一は、二人がこれから語ろうとしている事件を思い起こしてみた。

『美紀と口づけを交わした日から数日後の水曜日、いつものように真理の教室を覗いて一緒に帰ろうとしたが彼女は不在だった。真理を目で捜しながら怪訝そうにしている幸一を見つけた例の親友が、幸一を廊下の隅に追い詰めてから、貴重な情報を提供してくれた。

彼女の情報によると、真理は午後から体調が悪いと言って帰った

そうである。だが、どうやら体調が悪いというのは嘘で、本当は、幸一が美紀と会っていたという噂が流れていたらしく、それを耳にした真理がショックを受けて帰宅したらしい。誰がどこで見ていたのか不思議で仕方がない。

親友の話では、幸一が、美紀と二人きりで会わないと約束してくれたことを、真理がとても喜んでいたという。そして彼女の前でも、もし、幸一が嘘をついたら死んでしまうと云ったそうである。

幸一は親友に対して、美紀とあった目的と、予定通りに別れた旨を説明してみたが、約束を破るのは許せないとの一点張りであったので、情報提供についてのお礼だけを述べてさっさと帰宅した。

幸一は、何とはなしに不吉な感覚が脊髄に宿っていた。まさか本当に死んだりはいしないと思うが、真理と約束したときの、彼女の異様なまでの真剣な眼差しが記憶の中で不安を広げていた。

幸一の不安は的中した。その日の夜八時過ぎに、真理の母親から電話があった。真理が幸一の宅へ来ていないかという問い合わせであった。幸一は母親から状況を聞き出して、慌てて家を飛び出した。

父親のバイクを拝借して夜道を疾走した。三月の夜の空気はまだまだ冷たかった。エンジンの苦しそうなうねり声には構いもせず、アクセルを全開にして走った。風の冷たさのために目が潤んで、目尻から涙が飛び散った。真理の家まで電車を使うと一時間程かかるが、バイクだと三十分程で到着した。

幸一は、メットをハンドルに掛けてから少し気を落ち着かせた。ハンカチで鼻水や涙を拭いてから、髪を手櫛で直してインターフォンを押した。すぐに返事があって、玄関の引き戸がガラガラと音を立てて開いた。そのドアを開けてくれた若い女性を見た瞬間、幸一は思わず叫びそうになった。真理にそっくりな少女であった。そして彼女の背後から母親の声がして、

「ごめんね、三浦君、わざわざ来てもらうて。今夜も主人は東京やさかい、助かるわ。女二人やと不安やさかい」

と、廊下に座りながら幸一を迎え入れた。

「妹の秋子です」

真理にそっくりな女性が挨拶をした。真理と同様に、小柄で色白であった。特に目元が極似していて、母親とも似ている。年齢は美紀と同じはずだが、美紀よりは幼い感じがした。

「どこか、真理さんのいらっしやいそうな場所？」

と、幸一は尋ねた途端に恥ずかしくなった。そんなことを殊更確認しなくても、既に手を尽くしているのに決まっている。

「ええ。親戚とか、思い当たる所はすべて連絡しました」

母親は丁寧な答えてくれた。

「警察へは届けられたんですか？」

「ええ、ついさっき」

「とにかく捜してみましよう。どこか近くにいるかも知れないし」
そう言つて、幸一は再び玄関を出ようとした。

「十時には一旦戻ってきます」

と、振り返つて告げた後、さっさと外へ出て行つた。

幸一は、バイクで近所の公園や川の堤防、神社、寺、図書館、喫茶店、彼女の通った小学校や中学校などを一通り捜したが見つからなかった。次に高校周辺の公園や、よく行く喫茶店、ファーストフード店などを覗いて回った。姫路の繁華街まで来たが、夜の繁華街で真理の行きそうな所など無かった。ゲームセンターなども見てみたが、彼女が入るような雰囲気のお店ではなかった。

駅前の地下街に降りて、暖房の暖かい空気に触れると、全身の筋肉の緊張がほぐれて身体は一休み出来たが、心の緊張は全くほぐれなかった。ぼんやりと、遠い耳鳴りがしているような感覚であった。

ほとんどの店がシャッターを下ろしていたが、今ちょうど閉じようとしている売店があった。幸一はそこで売れ残りのメロンパンを買った。彼はそのパンを革ジャンのポケットに押し込んでから地下街を飛び出して行つた。どう考えても、ほとんどの店が閉店した薄

暗い地下街に真理がいるとは思えなかった。

十時半になろうとする頃、幸一は真理の家に戻った。真理を捜し出せないもどかしさと、真理の母親や秋子の落胆する表情を見るのが辛くて、俯き加減で力なく報告をした。そんな幸一の心根を察してか、

「ご苦労様、寒かったでしょ。ほんまにごめんね」

と言つて、母親が彼を暖かく招き入れてくれた。幸一には、その明らかな作り笑顔が却つて辛かった。

幸一は、案内された応接間の黒革のソファーにどっかりと腰を沈めた。暖かな空気と冷え切った身体。不安を募らせる家族の哀れな心境と微かに感じる疲労感。ゆっくり目を閉じると、深い沼底に落ちて行くような、苦痛を伴う快感と、目眩に似た脳内の揺らぎが怒涛のように渦巻いた。幸一はすぐに目を開けた。まだ安らぎの時間を得るには早過ぎると思った。

「ご迷惑をお掛けしています」

秋子が湯気立つコーヒーを運んで来てくれた。少し膝を曲げてカッブを優しくしなやかに置く姿を見ると、今度は美紀よりも大人びて見えた。幸一は、ぼんやりと疲れた瞳で秋子の目元を見つめていると、そこに真理がいるような錯覚を覚えた。

「ごめんな」

と、思わず口から出た自分の言葉に彼は驚いて、ばかりと幸一を見つめる秋子の瞳がより一層真理に似ていて、次の言葉を探し得なかった。

「え？」

彼女も軽く驚いた表情を浮かべた。その瞬間のあどけない幼さが幸一の心に特殊な興味を抱かせた。その幼さの上に滲んだ艶やかさは、美紀のからりとした明るい可愛さとは対照的で、真理と同様に潤いがあつて、幸一の心に素直に溶け込んで来た。

「コーヒーをありがとう。お姉さんを見つけられなくてごめん」

「いえいえ、ご迷惑を掛けているのは私たちの方ですから」

秋子は少し頭を下げながら、

「母が何か作っていますから、お楽にしています下さい」

そう言い残して部屋を出て行った。幸一は、微かに残った秋子の淡い残り香を感じながら、再び、先の見えない不安な心境へと迷い込んでいった。彼は一人で温かいコーヒーをすすりながら、何度も何度頭の中で繰り返される、不安と罪悪感と自己弁護の言葉で、後悔する余裕すら与えられなかった。

万が一にでも、真理が自傷したり事故にあったりしたら……。真理の行動も確かに軽薄に過ぎるが、幸一が約束を破ったのは紛れもない事実である。美紀との別れを電話で済まされなかったのは、きちんと説明するのが礼儀だと考えたからであるが、微かに未練のよくなものを感じていたのも事実であった。ちゃんと説明して友人関係を継続しようと目論んでいた。要は、二人の女を、それぞれ自分の都合の良い引き出しに置いておこうと努めたのである。どんなに自己弁護をしても、彼女の身に何か起これば、一生涯、罪悪感を背負っていかねばならないのは間違いないかった。

しばらくして、秋子がお盆に温かそうなうどんを乗せて、そよそよと歩いて来た。そして、はんなりとした出汁の香りが応接間に充滿した。幸一が思わず身を乗り出して、テーブルに置かれたうどん鉢を覗いた瞬間に、電話の冷たい呼び鈴が廊下で響いた。その刹那、不安と緊張と絶叫に近い、全員の心の波動がすべてのものを排他した。出汁の香りまでもが凍りついたように、幸一たちの意識から忘却された。

その無重力に近い心の状態でも、秋子は一心に電話機を目指して早歩きに努め、震える手で受話器を耳にあてた。幸一も、夢の中で疾走するような歯がゆい感覚で彼女のそばに辿り着いた。

そんな、極限まで張り詰めた空気の中で、動揺に耐えながらも、必死で電話の応対を始めた秋子がとても凜としていて、幸一の胸に熱い波紋が広がった。

『夏に生まれたのに秋子なの』

なぜだか、いつか聞いた真理の言葉が思い浮かんできた。

「はい、穂積です」

母親も走り寄ってきた。二人は、秋子の表情を瞬きもせずに凝視した。受話器の向こうの相手に回答する毎に、秋子の顔色が青ざめていく。

「はい、警察？事故？」

思わず口にした秋子の言葉で、母はその場に崩れかけた。幸一が母の身体を片腕で支えながら、秋子が手にしている受話器を奪おうとして、秋子の柔らかな手に触れた。一瞬の躊躇の後、彼は強引に奪い取ってから、秋子に母を支えるように目で依頼した。

「市民病院ですね、わかりました」

幸一の復唱する言葉に、母はしゃがんだままで、哀願するように幸一を見上げた。目尻に浮かんだ皺が哀れであつた。幸一は受話器を置いた。

「大丈夫ですよ、暴走族の事故です。身元不明の重体で意識もないそうです。年齢が近いので、念のために連絡をくれたそうです。真理さんが暴走族と係わるはずはないですけど、一応確認してきます」

「申し訳ないけどお願いします。夜道なので気をつけてね」

母はそこまで言うのが精一杯で、秋子に腕を抱えられたまま廊下に塞ぎ込んだ。秋子は泣いていた……。

幸一はバイクで夜道を疾走しながら、どこかの川にでも突っ込んで死んでしまいたいという衝動に駆られた。秋子や母親には暴走族の事故だと言ったが、正確には、暴走族に巻き込まれた事故であつた。十七八の少女が横断歩道を渡っていた。そこへ暴走族のバイクが数台、停車している自動車を追い越して信号を無視して交差点を突っ切ろうとした。歩行中の少女を発見し、急停車しようとして横転した一台のバイクに衝突されて、少女は重体となった。その少女はデニムスカートに濃紺のブレザースーツを着ていた。

それは、いつかの真理と同じコーディネイトであつた。幸一が急

に大人びた真理の姿に困惑して違和感を覚えた時の衣装と類似していた。真理は、家族が不在の時に出て行ったので、今日の真理の装いを誰も知らなかった。今はただ、重体の少女が真理である可能性が決して少なくないという事実だけが、幸一を自暴自棄な行動へと誘っていた。

もしも、その少女が本当に真理であつたなら、幸一も生きていてはならないような気がしていた。自殺ではなく、例え事故であつたとしても、彼女の生命が絶たれたり、生涯に残る傷を負ったりしたら、幸一は生きていく資格が無いと感じていた。

十五分程で市民病院に到着した。幸一はバイクのエンジンを切つてからふと星空を仰いだ。どこかで運命を操っている何者かが見下ろしているような気がした。そしてその何者かに、天に叫びたかつた。幸一は心の中で叫んだ。力いっぱい懇願した。真理が無事であることを、被害者が真理でないことを懇願した。自分の寿命を十年縮めてもらつても良いと誓った。真理と初詣に行つた夜、真剣に祈願をする人々を哀れんでいた自分が、今の自分を冷笑していた。しかし、数多の星たちは幸一に同情する様子もなく、普段どおりの単調な瞬きを続けていた。

幸一は、夜間専用の通用口から入り、受付で事情を話した。若い看護師がどこかに電話をして確認をとつた後、幸一を案内してくれた。夜の静まりかえつた暗い通路を、まるで見えないロープで繋がれて連行されるような心持で、看護師の後を付いて歩いた。看護師が、ある部屋の前に立ち止まってその扉に手を掛けた時には、ひたすら祈りの言葉を心の中で繰り返すことしか出来なかった。一歩一歩入口に近づきながら、早く確認したい気持ちと、結果に対する恐怖心が入り混じって、下半身の力が半ば抜けかけていた。耳鳴りと心臓の鼓動だけが頭に響く中、看護師に示された患者の顔を覗き込んだ。

彼女の顔を見た瞬間には、違和感と安堵感が幸一の中を駆け巡り、温かい血流が静かに緊張をほぐしていった。真理ではなかった。し

かし次の刹那には、目の前に横たわっている被害者の歴然とした事実を認識して、愕然たる悲哀の感情が押し寄せてきた。今は身元不明でも、やがてこの少女の身内や友人がここを訪れて、何とか幸一が免れ得た、悲痛のどん底に誰かが確実に陥るのであった。

幸一はとうとう下半身の力が抜け切つて、その場にしゃがみ込んでしまった。

「大丈夫？」

と、看護師が優しい声を掛けて、幸一の横に膝を曲げて並んでくれた。

「大丈夫です。僕の知り合いではありません」

「そう、良かったですね」

幸一は小さく吐息をついてから、

「あまり喜べないですよ。実際に怪我をしている人が目の前にいますから」

と、包帯に包まれて、体中に管を通された患者の姿を見ながら呟いた。

「いいのよ、心の中では素直に喜ばいいの。後は私たちがしっかりと看病しますから、あなたは早く家に帰りなさい」

幸一は、大人の女性の優しさを感じた分だけ、自分の不甲斐無さを痛感した。幸一はゆっくりと立ち上がって、もう一度患者の寝顔を見つめた。何とか助かって欲しいという気持ちがかみ上げてきた。

「頑張れ」

と、幸一は小さく呟いてから部屋を後にした。看護師がしばらく幸一の腕を支えながら歩いてくれた。

「もう大丈夫です。ありがとうございます」

そう言つて、幸一は看護師の瞳を見つめた。さっきまでは緊張で何も見えていなかったが、こうして落ち着いて見ると、彼女の年齢は幸一と左程変わらないような気がした。

「あなたは優しい人ね」

看護師が夜間通用口まで送ってくれた。

「看護師さんは強い人ですね」

彼女はにこりと健康そうに笑ってから、

「一応女性よ。強いと言われても素直に喜べないけど、でもありがたい。気をつけて帰ってね」

と言い残して仕事に戻っていった。

幸一は星空を見上げた。心の中で感謝の言葉を何度も繰り返した。しかし、やはり星たちはいつもと同じ態度で接していた。

第二話 再び 一（前書き）

高校時代の別れの場面を思い出しながら二人の心は再び距離を縮めていけるのか？

第二話 再び

幸一は、あの事件での最大の緊張感を強いられた場面を思い起こして、少々冷汗をかいてしまったが、日没前の涼やかな川風に、過去から持ってきた冷汗をさらりと乾かしてもらった。隣にいる真理も、気持ち良さそうに涼風で髪を洗っている。幸一は更に深い刻印が残る、その後の事件の結末に思いを馳せた。

『柱時計が0時を告げた。控えめな音量で、深みのある音色を響かせた。応接間のソファーに、幸一と秋子が向かい合って座っていた。母は寝室で横になっていた。幸一が病院から戻った時には、ふらふらと部屋を出てきたが、幸一の報告を聞いて少しは安堵したものの、すぐに寝室に戻った。』

「もう0時やのに……。いったい何してはるのやろ」

秋子が、もう何度も口にしたフレーズを繰り返した。幸一が病院から戻って来てまだ十分程度しか経っていないのに、もう何時間も経ているような気分であった。応接間に置いてあるストーブの温かみで、幸一の冷えた身体が漸く元通りに活動できるようになってきた。

「お姉さんの部屋を見せて欲しいんやけど、かまへん？」

幸一が、手持ち無沙汰を紛らわせるために提案した。秋子は一瞬迷ったようだが、幸一を労わるような優しい笑顔を浮かべて、

「いいですよ」

と、真理にそっくりの声色で幸一を惑わせた。秋子の後について階段を上がって行った。一段上を歩いていても、秋子は幸一より背丈が低かった。

「お正月にもお邪魔したんですよ」

幸一の声に振り返った秋子の肩が、彼の胸に触れた。

「ええ」

彼女はそう言うと、やや歩を速めて幸一との距離を空けた。秋子が先に部屋に入って灯りを点けた。主のいない部屋は、寂しい雰囲気

に満たされていた。

「お邪魔します」

そう言つて幸一は、部屋に足を踏み入れて周囲を見渡した。そして彼の視線は一点に釘付けとなり、再び鼓動が激しくうなり始めた。秋子は、恐る恐る幸一の瞳を横から覗き込んだまま、なす術も無くその場に立ち尽くした。

「俺は何て馬鹿なんや。何で、もつと早く気が付かなかったんや！」
そう言つてから彼は秋子に振り向いて、

「お姉さんのいそうな場所がわかったよ。今から行つてくる」
と、やや興奮気味に告げてから階段を駆け下りて行つた。幸一が見つめていたのは、壁に掛かった、襟元にフアーの付いた白いコートであつた。

幸一は円教寺に続く、書写山の西坂参道を駆け上つていた。秋子に手渡された懐中電灯を片手に無言で登り続けた。次第に息が上がつてきて、口と鼻から吐く息が、白い軌跡を残して闇に消えていった。若い女が、こんな人気の少ない山中に一人にいるとは常識では考えられないが、幸一には自信があつた。秋子に話した時もすぐに同意してくれた。

『初めて二人で出掛けた所でしょ？わかるような気がします』

秋子はそう言つて、幸一のために懐中電灯を用意してくれた。二人の心に希望が出てきたためか、玄関で、秋子から懐中電灯と搜索の委託を受けた時に、今まで全く感じていなかった羞恥を覚えた。

幸一は、時折立ち止まつて息を整えながら星の瞬きを見上げた。今度は祈る気持ちはなかった。自信があつた。そして、真理は幸一の到着を待ち侘びているような気がしてならなかった。彼は再び走り始めた。徒歩で四十分程度の道のりを二十分程で駆け上り、『妙光院』の横を通り過ぎた。『湯屋橋』を渡り、正月に御神籤を引いた『魔尼殿』の前を通り過ぎた。そして『三つの堂』の広い境内に辿り着いた。

だが、そこには人影も人の気配も無かった。幸一は、月明かりとわずかな電燈の明かりと懷中電燈を頼りに、駆け足で辺りを捜し回った。

「幸一さん」

大講堂と食堂の間から人影が現れた。

「よお。やつぱりここにいたか」

そう言つて、幸一は彼女に駆け寄つた。真理は嬉しそうに笑つていた。月明かりに白く浮かんだ笑顔が妖美であつた。

「きつと来てくれると思うてました」

幸一は、真理を抱き締めたい衝動に駆られた。

「こんな人気の少ない場所に、一人でいたりしたら危ないやろ」

幸一はそう言いながら、月明かりが届きやすい、大講堂の石階段に真理を誘つてゆっくり歩んだ。

「だから隠れてたの。誰も通らはらへんかつたわ」

こんな平日の夜中に、寺の関係者以外に人がいるはずもなかった。

「それはそれで不気味やろう」

「人がいるほうが怖いって言わはつたのは幸一さんよ。」

二人は、ゆっくりと大講堂の中心にある石階段を上がり、大講堂の板敷きの縁に腰を下ろした。

「ごめんなさいね。みんな心配してはるやろね？」

「当たり前や。秋子さんも心配してたぞ」

なぜか、秋子の名前が一番に思い浮かんだ。真理は幸一の身体にぴたりと身を寄せてきた。

「ああ、しんど」

幸一は、真理の顔を見て安堵したためか急に疲労感を覚えた。

「ほんま。幸一さんの身体は火照つてはるわ。うちは冷め切つているのに」

幸一には彼女の言葉が冷たく胸に残つた。

「お腹空いたやろ」

そう言つて、幸一は地下街で買ったパンを取り出した。革ジャンの

ポケットに埋もれていたメロンパンは、押しつぶされて変形していた。

「ありがとう。温かいわ、このパン。見場は悪いけど」

幸一も、反対のポケットにあるもう一つのメロンパンを取り出した。無意識のうちに、同じものを二つ買っていたことに自分で驚いた。

彼は袋を開けてひとかぶりしてみたが、温かくなかった。真理も少しちぎって口に運んでから、

「温かくておいしいわ」

と、再び意味深な言葉を吐いた。

「星空って温かいなあ」

幸一は病院に入る前のことを思い出した。あんなに冷ややかな態度だった星たちが、真理を、いや、幸一を救ってくれたような気がした。

「この前は、悲しいて言うたはったやないの」

真理は細かいことを指摘する割には、別にどちらでも良いといった風であった。

「御守りのおかげかな？君を見つけられたのは……」

本当は、最悪の事態を免れ得たことを御守りのお陰だと言いたかった。

「私があげた御守り？」

嬉しそうに、真理が幸一の瞳を覗き込んだ。

「ああ」

そう言つて、幸一は内ポケットから財布を抜き出し、御守りを取り出した。

「持っていてくれはったんやね、ありがとう。とっても嬉しいわ」

しかし、真理は言葉ほどには嬉しそうな表情は浮かべずに、静かに俯いていた。

「ごめんな、約束破ってしもて」

真理は俯いたままで、膝を抱えるように身を丸めて幸一に身体を寄せていた。

「でもな、美紀と会ってきちんと話をして、理由も説明して、もう二人きりで会わないで美紀も納得してくれた。電話で済ませるのも失礼やし、正しく伝えにくいから会ったんや」

「でも、約束は約束です」

幸一には、真理の言葉が意外であつた。真理は、幸一が美紀と会つたという事実だけで腹をたて、無謀な行動に出たと思つていた。だから、本来の目的を達するために美紀に会つたことを説明し、目的が果たせたことを伝えれば誤解は解けると考えていた。それ故、真理の頑固な言葉は幸一には解せなかつた。ただ拗ねているだけなのかも知れないと考えて再度説得してみた。

「確かに約束を破つたことは申し訳ないと思うし何度でも謝る。そやけど、美紀に会いたくて会つた訳でもないし、君との約束を守るために会つたんや。一度くらい余計に会つても問題無いやろ」

幸一は、この際多少の嘘は仕方ないと思つた。最後に美紀に会いたかつたのは事実であつた。心のどこかで、友人という形で細く長く付き合いたいという希望もあつた。

「そうやね、何度も会つてはるもの。今更、一回位余分に会わはつたかて何がどうなるものでもないわね」

真理の声は快活で、何かが吹っ切れたような感が漂つてきた。

「幸一さんは、大きな約束を守るために小さく約束を破らはつた。目的達成のためには少々無理な手段でも使う。男の人らしい行動やし、私たちがこれから人生を生きていくには必要な考え方やと思う。そやけどね、女は……いえ、私は、嘘を吐かれると、その人そのものが信じられへんようになるの。まして『絶対よつて』大袈裟やつたかも知れんけど、私が命を懸けるとまで言つた約束を破られたりしたら……。もう幸一さんが何を言わはつても、何をしはつても、幸一さんのすべてを疑つてしまう。信じたくても心のどこかで幸一さんを疑つてしまう。そんな自分が嫌やし、そんな葛藤を続けるのは耐えられへんわ」

「ごめん。もう二度と嘘はつかへんよ」

「もう遅いわ。何言わはつても、幸一さんの言葉が軽く聞こえます。そやさかい、もう、今までみたいに親しいお付き合いはやめましょ」
真理はそう言いながらも、先刻より更に身体を寄り添って幸一に密着していた。身体はこうしてしつかりと触れ合って温かみを生み出しているのに、心はねじれ方向にすれ違つて、真冬に窓を開けた時のように、冷たい気が心の空間に流れ込んで来た。

幸一は、これが振られる側の気持ちなのかと、初めての体験を心の隅で冷静に眺めながらも、何かの検定試験などで不合格を突きつけられて、現実の不甲斐無い自分を目の当たりにした時のように、心細い切なさや無力感と惨めさが入り混じった落胆が、一瞬で身体中を駆け巡った。

「あつ、流れ星！」

真理が、もう別れ話を打ち切りたいとばかりに声を変調した。幸一は、まだ別れ話を振り出しに戻せないかと、真理が押しやった会話の流れに未練を残しながら、ゆつくりと流れ星の去った星空を見上げた。そこには流れるような光の波はなく、普段の単調な輝きの小波が静かに揺れていた。

「あの子が死んだのかな……」

「あの子？」

「君の身代わりかも知れへん」

「身代わり？」

薄い闇にも目が慣れてきたのか、真理のあどけない表情が悲しくらいに愛らしかった。

「君と同じくらいの歳格好の少女が交通事故に遭って重体だと、警察から連絡があつてね、慌てて病院まで確認に行ったけど君ではなかった。正直ほつとしたけど、目の前の少女は現実に重体で、気の毒で、俺が免れた悲惨な思いを誰かが確実に体験すると考えたら辛くて……。何もできずに出てきてしもた」

「そつやったの……。幸一さんにも辛い思いをさせてしまったわね、ごめんなさい」

幸一は、今も十分辛いよと、心で呟きながら星空を見上げて両手を合わせた。

看護師は、他人の幸一に詳しい容態は言わなかったが、警察からの最初の情報では、危険な状態だから早く確認に行くように言われた。また、ベッドに横たわって全身に管を通された姿を見た幸一にとっては、彼女が死んでしまったことがごく自然に感じられた。真理も同じように手を合わせて目を閉じた。

しばらくの間、星の輝きに打たれるように、二人は静かに膝を抱いて、互いの身体の温かみを有難く感じていた。

「もう信じてくれへんのか」

吐息を吐くついでに放ったかのような力ない声であった。

「そうね」

真理の声にはどこか力強い響きがあった。

「君にとつて人を信じるってどういうこと？」

幸一は美紀とも交わした話題を思い出した。

「難しいわね。その人が私に誠実に接してくれるかどうかやと思う。誠実に接してくれる人は信用できるわ」

「誠実ってなに？」

一瞬のしじまが訪れて、真理は足元の石段を足で撫でた。

「一時的には自分の我を捨てても、相手のために行動できる人かな。相手が家族であったり、恋人であったり、仕事であったり。夢であったり目標であったり」

幸一は真理の言葉に違和感を覚えた。

「じゃあ、自分を犠牲にしても君に尽くす人が信用できる人っていうことか？」

「尽くしてもらわなくて結構よ。他の人たちより少しだけ私のことを大事に思ってくれはって、嘘を言ったり、約束を破ったり、私のことを試したりしはらへんかったら、簡単に信用するわよ」

「たった一回でも約束を破ったらもう信用されへんのか。厳しいな」
幸一は自嘲気味に軽く笑った。真理も笑顔を浮かべて、

「幸一さんが約束を破らはったのは確かに一つのきつかけやけど、幸一さんを信用出来なくなったのはそれがすべてやないの……」
と言つて、両手で口元を覆つてから息で手を温めた。

「じゃあ、なんで？」

幸一は、真理の両手を彼の両手で包みこんで温め始めた。

「感じたから……」

幸一は真理の言葉に啞然として、しばらく呼吸をすることさえも忘れた。

「幸一さんは信用できない人やつて感じたから。いつも誠実でいてくれはる人やないつて感じたから」

真理の手は氷のように冷たかった。幸一は、どうにも理解し得ない彼女の説明に絶望的な距離感を感じながら、まだどこかで修復を望んでいた自分の甘さを嘲笑した。

「非論理的やな」

幸一は、糸の切れた凧が谷底に舞い落ちて行く様な絶望感と、諦めの決意をしたことによる、ある種の開放感を同時に感じながら彼女の手を温め続けた。

「女の脳はね、男ほど単純やないから、何から何まで論理的に説明できないのよ」

そう言つて真理はくすりと笑つた。

「なかなか都合のええ理論やなあ」

幸一も苦笑に近い笑い声を漏らした。

「君は感性で判断するんやね。俺は信じたいと思つたら信じるし、信じたくないと思つたら信じない」

「幸一さんらしいわ」

真理は少し幸一の肩に頭を預けてから、

「そうやね。そういう部分もあるわね。もしかしたら私はずっと幸一さんのことを信じたいと思つて来ただけなのかも知れへんわね」と、付き合つたというには余りに短すぎる数ヶ月を思い起こして、懐かしむような語気を漂わせた。

「ずっと心のどこかで、胡散臭い奴やと感じていながら、信じる努力をしてくれていた訳か」

幸一は明るく笑いながらも、真理は、自分の心の動向をずっと把握していたのではないかといった薄気味悪さを感じた。

幸一は、このままもう少し別れの余韻を味わっていたような気がした。この山を降りてしまえば、もうただの友人になってしまいういや、きつとろくに口も利けない関係になってしまいうと予感した。結局、真理のことも美紀のことも美しいと思ったし、愛らしく感じたし、熱く感じるものもあつた。いつも側に居たいとも思つた。だが、こうして側に居ても左程幸福感はなかつた。いつものことであつた。

真理の心は離れてしまっているのに、こうして別れの絶望と、自然と蘇ってくる思い出の中の甘い空気を味わっている時間が自虐的でもあり、心地良くもあり、このまま二人で死んでしまおうかといった衝動的な波も訪れて、なかなかこの空間からの離脱を決意しかねていた。

「そろそろ帰らないとみんなが心配しはるわ」

彼女の手がもう少し温まったら帰ろうと決意しかけていた幸一の心を、真理の言葉が落胆させた。ここでも先に大人の行動をされてしまった。この『三つの堂』に来てからというものの、常に、真理に先導されているようで嫉妬さへ覚えた。彼女が急に大人になったように感じた。もしかすると、今まで幼い振りをしていただけなのかも知れない。案外、試されていたのは自分なのかも知れないと、再び自虐的な反省をせざるを得なかつた。

「もう、充分心配させてるよ」

幸一は皮肉交じりの冗談で嫉妬を晴らした。

「そうやね。ごめんなさい」

真理はそう言つて幸一の膝を軽くつねってからさつと立ち上がった。その瞬間、彼女のポケットから小さな瓶のような物が零れて石段を転がり落ちた。真理が慌てて石段を駆け下りて小瓶を拾い上げた。

「わあ、危なかった。壊れたら父に叱られるところやったわ」

そう言ってからその小瓶をポケットにしまい込んだ。

「何？それ……」

「父の催眠剤。こつそり持つて来たの」

あつさりと告げた真理の、眼底に潜む本物の覚悟が、幸一の心に一気に流れ込んで来て彼の心を瞬く間に冷却した。幸一はまだ立ち上がれぬままに凝固した。真理は本当に死ぬ気であつたのだろうか……。幸一がここに隠れている真理を捜し出さなかつたならば、実際に死ぬ積りだつたのだろうか……。幸一は先ほどまでの身体の熱などは完全に奪われて、真冬ほどの寒さを感じる書写山の冷氣と、真理の頑なな思いに骨の髄まで凍りついてしまった。

幸一が真理を連れて帰ると、玄関で秋子が出迎えてくれた。山を降りてすぐに、公衆電話で連絡を入れておいたので、出迎えた秋子も落ち着いていた。

「さようなら」

真理の言葉は至極自然で、明日には再び爽やかに挨拶をしてくれそうな感じすら覚えた。彼女は一度も振り返ることなく二階にある自分の部屋へと姿を消して行った。ふと、桜吹雪に紛れて消え去った美紀の後姿がそこに重なった。表まで秋子が見送りに出てくれた。

「本当にありがとうございました」

バイクにまたがった幸一に、その横に立っている秋子が深く頭を下げた。幸一は健気な秋子に新鮮な魅力を感じた。秋子はまだ他人を傷つけたり、他人に傷つけられたりしていないと感じた。だがそれは、何の根拠もない幸一の虚しい切望に過ぎなかった。

「今夜はそつとしておいてあげて」

「はい」

と、幸一の言葉に彼女はにこりと清潔に笑った。その笑顔は、後輩であつた頃の美紀が、幸一に対する好意を含んだ瞳で、歯切れ良く返事を返してくれた頃のことを思い起こさせた。

「じゃあ元気だね、おやすみ」

幸一はエンジンを掛けてクラッチを握った。

「おやすみなさい。三浦さんもお元気で」

秋子の言葉に、幸一ははつと振り向いた。初めて名前を呼ばれた時の小さな興奮であった。秋子は肩をすぼめて、やや羞恥を含んだ瞳で、上目使いに彼の瞳を伺った。そして、不意に彼女が手を伸ばして、革ジャンの肩に付いていた真理の髪の毛を取り除いた。幸一は真理の妹に髪を取り除かれたことで、周囲のすべてが、幸一に別れを覚悟させているような錯覚を覚えた。

発進する寸前に秋子が軽く会釈した。その瞬間、彼はそこに真理と美紀とを同時に見たような幻想を抱いた。とても美しい瞬間であった。

『さようなら』

と、幸一は心の中で呟いた。もう二度と会うことは無いであろう。例え会う機会があつたにせよ、もうこの清純さは失われていることだろう。それは彼女の問題ではなく、今のこの状況が特殊であり、幸一にそう感じさせているからである。そんなことを考えながら寒い夜風の中を疾走した』

「もう一回あつたよな、一緒に星を眺めたこと」

過去から舞い戻った幸一が、二人が口にすることを躊躇していた話題に思い切って踏み込んだ。

にわかに、真理の表情が硬く曇った。そしてその変化を彼に悟られまいと窮する仕草が可憐であった。幸一は、まっすぐに真理を見つめて静かに言葉を吐いた。

「あの時は本当にごめん。何度謝っても、何も修復されないことはわかっているけど」

真理もじつと幸一を見つめてから、

「いいえ、私の方こそごめんなさい。私も幸一さんのことをいつまでも傷つけていたと思う」

真理もそう謝ってから、当時の気持ちを思い出すかのように、虚ろな瞳を浮かべて川の面に視線を落とした。

あの事件の後、学校で出会っても真理は幸一を全く無視した。二度と口を利くことは無かった。当然幸一は深く傷ついたが、自業自得であることは百も承知していた。

別れてから半年もすると幸一の心も平静を取戻してきた。思い出の真理のことはいつまでも愛していたが、現実の真理を見ても、もう別人のように感じていた。結局、さようならも言えないまま卒業し、後味の悪い関係をそのまま高校時代の思い出の中に封じ込めていた。

「だいぶ日が暮れてきたなあ」

「ええ」

周囲はほとんど闇に包まれて、星の輝きが一層鮮やかであった。

「俺の部屋へ行くのか」

「かまへんの？」

彼女の言葉は夕風にさらりと流れて、幸一は大きく背伸びをした。

「へえー、なかなかきれいに片付けてはるわ」

「皮肉か？」

幸一は床に散らばった新聞紙や雑誌やらを、腰を曲げて拾い集めながら横目使いに言った。

「きれいな方やわ、男の子の部屋にしたら。相変わらずいろんな女の子が好きなんやね」

真理が、壁に張り巡らされた様々なアイドルポスターを一枚一枚見ながら言った。

「まあな、美しいものは目の保養になる」

幸一はベッドに掛かったタオルケットを隅みに押しやってから、そこに腰掛けて弁解気味に言った。

「目の保養ねえ……。幸一さんらしいわ」

真理はくすつと笑いながら幸一の示した座布団の上に膝を疊んだ。

そんなしおらしい彼女の影を見ていると、胸を絞られるような熱い血潮が全身を駆け巡った。幸一がベッドから立上って電気ポットで湯を沸かし始めた。次第に大きくなっていく沸騰音が妙に二人の間に響き渡った。それで、オーディオのスイッチをいれて音を流した。「テレビがないもので」

真理は幸一の言葉の意味が解せなくて小首を傾げた。そんな何気ない彼女の仕草にも、彼は過去の思いからときめきを蘇らせた。

「秋子さんはどこの大学？」

彼は軽い調子で尋ねながら、種類の違うマグカップを二つ取り出して、インスタントコーヒの粉末をスプーンも使わずに流し込んだ。

「D大よ」

「へえ、すごいね。で、真理ちゃんは？」

「私は地元のさる有名大学です」

幸一は詮索するのも面倒なので、ちよつとだけ首を傾げて話題を変えた。

「いくつ？」

「二十歳よ、もう」

「砂糖の数やけど」

「なんや、お砂糖はいらんわよ、太るし」

「少しは肥った方がいいのに」

彼女は相変わらず、ややともすると病弱に見える程の細身であった。だが、以前より女らしい身体つきになった感もあった。

幸一は、二度と会うことは無いものと確信しながらも、時々懐かしく思い出していた女が目の前にいるという信じ難い幸運を実感しながらも、万に一つの偶然を尋常に受けとめている自分が不思議でもあった。

「二年なんてあつと言う間やなあ」

幸一は、コーヒーの入ったマグカップを真理に手渡しながら呟いた。「ありがとう」

真理は両手でカップを受け取った。

「あつ、冷たい飲み物の方が良かった？」

「いいえ、これで充分」

「良かった。冷たい飲み物なんて置いて無いから」

真理はにこりと微笑んでから一口コーヒを含んだ。幸一は再びベッドに腰掛けてカップを口に運んだ。

「なんか不思議な気持ちやなあ。高校時代には、あれ以来一度も口を利かなかったのに、今はまた、何にも無かったみたいに話せるのやから」

幸一が座った勢いでコーヒが揺れて、思ったよりも大量にコーヒが口に入って舌を火傷した。

「そうね」

真理はカップの中の褐色の液体を見つめていて、幸一のハプニングには気付かなかった。

「少しは大人になったのよ、二人とも」

真理がカップを見つめたまま呟いた。幸一は、彼女が俯いているのを良いことに、口を半開きにして犬の様に舌を出して冷やした。

「俺は相変わらず我儘やけど」

そう言うのと再び舌を出して冷却した。

「私はあの当時、幸一さんのことが何も信じられへんようになってしまったの」

幸一は舌を冷やしながら、書写山で過ごした最後の夜の、冷たい空気を懐かしく思い出していた。

「どうしはったの？」

窓の外を見ながら、思い出の冷気を味わっていた幸一は、舌を出したままにしていることに気付いた。

「コーヒが熱くて」

真理は大きく笑ってから、

「幸一さんは、感性で判断するんやなくて、自分の意思で、信じたかと思っただけ信じてるって言わはった」

と言って、火傷をしないように優しくカップに唇を寄せた。

「そんなこと言ったか。なかなか格好いいセリフや」

真理は、照れ屋の幸一を優しく見つめてから、

「私はあの時、感じたからと言ったけど、やっぱりどこかで信じることを諦めていた。信じることを止めたかった。信じるのが辛かったのかも知れへんわ」

と、胸の奥から搾り出してきたような言葉を静かに語った。

「やっぱり女の脳は複雑や。男には理解できん」

照れ隠しの言葉に、真理もふっと笑いを零してから、

「お別れの話をしてから半年もするとね、もう一度信じたくなかったの……」

と、さりげなく呟いた言の葉は、過去と現在を往来して浮ついていく幸一の心を熱く目覚めさせた。

「その割にはかなり厳しく無視されたけど」

幸一は茶化し気味に微笑んでからカップに口をつけた。

「仲直りする機会がなくて……。仲直り出来なくても普通に接したかったのに、顔を見るとなぜか冷たくしてしまって……。自分でも良くわからなかった」

一瞬間の沈黙が、たった六畳の空間に染み渡り、呼吸の音までも抑制するようであった。真理への思いを過去から背負って来てしまった幸一は、失った大切なものが再び目の前に現れている幸福に戸惑いながらも、傷ついたままになっていた心の一部が癒されていく安らぎを感じていた。そして、真理への想いがゆっくりと再生されていった。

だが昔のように、一方的に理想像を創作して現実の真理に幻滅するようなことは無かった。むしろ現実の真理が欲しいと思った。

「涼しいわね、この部屋」

時折迷い込んでくる川風が、二人の肌を穏やかに撫でては去っていった。

「今夜は特別涼しい風が入ってくるなあ」

だが、真理は幸一の言葉には別段注意を払わずに、

「本が好きなんやね」

と立上って、ぎっしり詰まった本棚の前に立った。

「本があるからといって読んでいるとは限らない」

幸一の言葉に真理は少し微笑んだものの、沈黙を嫌がるかのように話題を絶やさなかった。

「あれ、卒業写真やわ。見せてもらってもかまへん？」

「いいけど、君が持っているのと同じやと思うよ」

「そうかもね」

彼女は優しく答えておいて、本棚から厚い表紙のアルバムを重そうに引き抜くと、再び床に足を畳んで、アルバムを膝に置いてから、白い手で繰り始めた。

やはり、彼女の心も過去に遡っているのかと、幸一はコーヒを口にしながら、左側に足を崩した彼女のふくらはぎを見るときもなく見つめていた。

「みんな、どうしてはるかなあ」

「まあ元気にしてはるよ、みんな若いし」

傷一つない真理の手が、アルバムを真中までめくった時、アルバムに挟まれた数枚のスナップ写真が出てきた。幸一は、後悔と焦りの紅潮を浮かべて視線を外した。その写真は、体育祭や文化祭の時の真理が写っていた。

「まあ、若い」

彼女は嬉しさを目許に浮かべて、空々しく窓の外の賀茂川に視線を外している幸一をちらりと見た。幸一が、カメラ好きの友人に頼んで、望遠レンズで遠くから隠し撮りして貰ったものであった。

幸一は心の動揺を悟られまいと、どっかとベッドに腰掛けて、冷めたコーヒをすすった。ちょうどその時音楽が止まった。

「そろそろ帰った方がいいのと違う？ バイクで送って行くよ」

と、幸一は窮地を脱し得た明るい声で言った。

「ありがとう。お願いするわ」

真理は、何かを語りかけているような深い笑顔を浮かべた。

第二話 再び 二（前書き）

真理を家まで送った幸一は、秋子に会って欲しいという真理の言葉で家に入った。しかし、秋子は戻ってこない。そこへ秋子から驚く内容の電話が入る……。

第二話 再び 二

幸一は真理の身体の温かみを背に感じていた。だが、昔彼女を自転車の後ろに乗せた時のような熱い感動はなかった。北山橋を渡って堤防沿いに少し上がり、彼女が示す所でバイクを止めた。真理はメットをとってから、

「寄っていかはったら？」

と、乱れた髪を左手で軽く整えながら幸一を斜めに見上げた。

「でも、夜に迷惑やし……」

「大丈夫よ、祖母は部屋に籠もりきりやし、秋子に会って欲しいわ。可愛いくならはったわよ」

真理はそう言くと、不意に左手を伸ばしてバイクのキーを右に回した。エンジンが止まり幸一もメットを脱いだ。

「大胆やね」

幸一は強引な真理の行為に面食らって、そのまま彼女の指示通りに動いた。真理は幸一を応接間に案内して、部屋の真中に置かれたソファーに座らせて出て行った。

立派な建物であった。京都の旧家によく見る光景で、苔むした庭に、松の木が壮麗な枝振りを披露している。内部は少々手を加えていて、和洋折衷の造りになっていた。彼がいる所はフローリングになっていて、二人掛けのソファーが一脚と、一人掛けのソファーが二脚、テーブルを挟んで並べてある。戸棚には高級そうなブランドーやウイスキーが並んでいた。

幸一が、応接間の縁側から、薄灯かりに照らされた庭を眺めていると、スリッパの軽い足音が廊下から近づいてきてドアが開いた。真理が両手で赤い漆塗りの盆を持って慎ましく入って来た。巻寿司とお吸い物とお茶を、しなやかな所作でテーブルの上に置いた。その仕草が部屋の気品に溶け込んでいて、思わず白い指先に見とれてしまった。

「どうぞ」

彼女の声に少し驚いた幸一は、大人びた美しさに揺れた心根を悟られまいと、うつ向いたままで手を合わせた。

「頂きます」

幸一と向かい合ってソファーに腰を沈めた真理は、何とはなしに不安気な心の内をその澄んだ瞳に浮かべていた。

「どうかした？」

幸一は、箸の動きは止めずに、視線だけを彼女に注いだ。

「うん、大したことやないけど、秋子がまだ帰ってへんの。遅うなるときはいつも連絡してきはるのに」

「まだ十時前やし、大丈夫や。そのうちに連絡してきはるよ」

しかし刻々と過ぎていく時間が、そんな幸一の言葉を空々しいものに変えていき、昔話しも、途切れがちで空虚な会話になっていった。

「こんなこと一度やってなかった。祖母もそう言つたはるわ」

「お婆さんは？」

「最近、少し身体の具合を悪うしはって、部屋に籠もりきりやの」

幸一は背筋に不気味な寒気を感じて、思わずくしゃみをした。

「冷房効きすぎてる？」

真理が労わるような瞳を幸一に向けたとき、彼は、真理が行方不明になった夜の、秋子の意地らしい程の明るい振る舞いを思い浮かべた。そして夏だというのに、当時の寒くて心凍るような緊張感が懐かしく蘇ってきた。

「部屋、見せてもらってもええかな？秋子さんの部屋。何かわかるかも知れへんさかい」

幸一の言葉に真理は小さく頷いて、すらりと立上った。白いショートパンツに履きかえた、彼女の白い脚がきれいに伸びた。こんな時であるのに、幸一は背丈が自分の肩ほどしかない小柄な真理を後ろから抱きしめたいような衝動を覚えた。

「どうぞ」

真理が先に入って灯かりをつけた。女の子の部屋らしく、明るい色

調でまとめられており、化粧やら香水やらの甘い香りが充満していた。秋子の部屋は二階にある。幸一は、部屋の香りに胸が詰まりそうになって窓を開けた。

ここでも賀茂の流れが、街の灯かりをその川面に反映して、まるで細長い鏡が四条辺りまで敷かれているかのようであった。

幸一はまず机の上を調べた。教科書や辞書の類が右隅に積んである以外には、閉じられた文庫本と銀ぶちの眼鏡が置いてあるだけであつた。

「友達の所にも泊まらる積りかしら」

「出掛ける時には、コンタクトレンズをはめていかはるの？」

幸一はドレッサーの隅に置かれた小さなケースを手にとった。

「ええ。眼鏡かけた顔は嫌いやつて、よう言うてはったし」

幸一はレンズの収容ケースを開けてみたが、洗浄液が入っているだけであつた。

「最初から泊まるつもりなら、このケースを持っていかがはるやろうなあ、普通」

「忘れることもあるわ」

「そうやね」

幸一は敢えて反論はしなかったが、秋子は泊まる予定で出掛けたのではないような印象を受けた。

幸一がケースを元の場所に戻した時、下の階で電話が鳴り始めた。はつと、真理が期待と不安とをその瞳に浮かべて、階段を駆け降りて行つた。幸一もゆつくりと後に従つた。幸一には不安の方が大きかった。この電話が、何か悲劇的なものをもたらしそうであつた。

「秋子！」

第一声で真理が大きく叫んだ後は、安堵と不安が混じつたような複雑な表情を浮かべて、じつと秋子の話しに聞き入っている様子であつた。

「こっちは大丈夫よ、何も変わりないわ。あつ、幸一さんと偶然会つてね、今来てはるんよ、そやさかい早よう帰つて来て」

真理はそう言った後、更に、相槌を打ちながら集中して聞いていた。
「ちよつと待つて」

と、最後に真理が叫んだが、やがて静かに受話器を戻して小さな溜息を一つ落とした。幸一は、彼女の手元から零れた色気を感じながら、小さな唇が開くのを待った。ほんのわずかなしじまが不気味に広がった後、真理が穏やかに身を翻して、不安をいっぱいに湛えた視線を投げ掛けてきた。一輪の草花が冷たい雨に耐えているような健気さを感じた。

「秋子から。母の昔の女友達と、円山公園の料亭で食事してはるつて。今晚はその人と旅館に泊まるけど心配いらないつて。それから母には絶対言ったらあかんで言わはった。理由を聞いたけど、とにかく言うたらあかん、後でちゃんと説明するさかい、今はお願いを聞いてつて……。それで切られてしもたわ」

「女友達？」

「ええ、昔の女友達としか……」

「明日戻るつて言わはった？」

「尋ねたけどはつきり言わはらへんの。とにかく大丈夫や、心配いらんて……」

「そうか。でも、秋子さんは無事やったし、とにかくひと安心やな。事情はわからんけど身体が元気ならええやないか」

「そうやね。元気な声やったし、安心安心」

そう言つて真理は明るく作り笑顔を浮かべた。幸一は、電話機の前で突っ立って話している不自然さに気付いて、

「もう一度、部屋を調べてみよか」

と、やや強い口調で提案して、返事も待たずに一人で歩き始めた。真理も、彼にすぎりつくようにして階段を上がって行った。

「引き出しの中も見せてもらうよ」

「ええ」

幸一は、秋子の机にある二つの引き出しを静かに引いた。上の段には、文具などがあつて別段変つたものは無かつた。

だが、下の引き出しには少々変わったものがあつた。変色した古惚けた紙袋と、新しく白い封筒、それから、どこかの店の古いマツチ箱が一箱あつた。

新しい封筒には住所が書かれていたので、郵便物のようであつた。古い紙袋には何も記載されておらず、長い間どこかに保管されていた感じであつた。

幸一はまず古い紙袋を手にとって、中のものを机の上に広げた。

「やあ、お母さんの写真やわ。えらい若い時の写真みたいやわ」

真理は嬉しそうに二三十枚の写真を手にとって、一枚一枚眺めていった。幸一も、彼女が見終わつた物を順次見つめていった。

今の真理と同じ年頃の写真であつた。モノクロでなかったら、真理の写真だと言われても疑えないほど良く似ている。京都の名所で写してある風で、幸一は裏に書かれた年月日順に分類してみた。

すると、それらはすべて昭和四十八年の九月二十七日から三十日まで撮られた写真であることがわかつた。

「昭和四十八年。今からちょうど二十年前やなあ。旅行にでも行かはつた時の写真かしら？」

そう言つて怪訝そうに首を傾げている真理に、

「京都生まれの京都市育ちの人が、四日間もかけて京都を旅行しはるのかなあ」

と、幸一が助言した。彼の言葉に少し納得した真理は、ちよつと考えてみてから、

「そしてら、父と一緒に回つたとか。父は京都生まれやないさかい」と、自身ありげに提言した。

「それやったら、お父さんと一緒に写真が一枚位あつてもええやろう。全部お母さんが一人で写つたはる」

漠とした疑問に包まれた幸一は小さな吐息をついたが、もう一つの、最近の物らしい白い封筒の中身も取り出してみた。

中からは、同じく母の若い時の写真が一枚だけ出てきた。どこかの橋の上で撮つた物らしい。しかも、なぜか写真の縁が切り取られ

ていて傷みが激しかった。幸一は再び写真の束を手早く繰った。

「無いなあ」

幸一は怪訝そうに呟いた。

「何が無いの？」

「こっちの写真の束には、この橋の上で撮った写真が無い」

「そう」

真理はなぜ幸一そんなことを気にしているのかわからず、彼の瞳を覗いた刹那、その輝きに胸を突かれて息を飲んだ。

「何でこの一枚の写真だけ縁を切り取ってある？何で日付がない？何でこんなに古びて傷んでいる？何で新しい封筒に入っている？」

幸一はやや興奮気味に疑問点を声に出した。

「知らんわ、そんなこと……」

熱くなってきた幸一に置いてきぼりにされたようで、真理は少し口を尖らせた。

「これを見て」

幸一は、新しい封筒を真理に手渡した。それは、秋子宛てにはなっているが、送り主の名前も住所も書いていない。

「何か怪しい手紙やわ」

裏表を何度も返してみながら、彼女は小首を傾げて左手でそつと前髪を横へ流した。なぜかその仕草に幸一は安堵した。

「スタンプが擦れていて郵便局名はわからんけど、消印は七月二十五日で今日は八月三日」

真理は口をつぐんだまま頷いた。

「お母さんの昔の友達とやらがこの手紙で秋子さん呼び出したんだと違ふやろか。昔の友達であることを示すために、若い頃の写真を同封してきたんやろ。手紙の到着日は消印の翌日位やろから日程的には辻褄が合う」

「その秋子と呼びだした手紙はどこにあるの？」

「秋子さんが持って行った。手紙に待ち合わせ場所の地図でも書いてあったんやろ。円山公園いうたかて広いさかい」

真理は感心したように頷いた。

幸一は古いマッチ箱を手にとって見た。『クラブすみれ』と書いてあり、これもかなり古い代物であった。

「『クラブすみれ』は知ってる？」

「さあ、知らんわ、クラブなんて行ったことあらへんし」

「祇園、新橋か。聞いたことない店やなあ」

幸一はマッチ箱の横に書いてある佳所を読んでみた。

「幸一さん、祇園のこと詳しいの？」

「以前、祇園の店でバイトしていたことがあるから」

「へえ、私も飲みに行きたいわ」

真理の言葉に、ふと二年前の元旦に二人で酒を飲んだことを思い出した。ほんのりと頬を紅く染めた愛らしい酔い方が懐かしくて、あの時の香りがふつと流れて来た感じがした。

「何でお母さんの若い時分の写真や、古いマッチ箱を秋子さんが持ってるのかな？」

幸一は真理の言葉には軽く微笑んだだけで次の疑問を口にした。

「この部屋は昔、母の部屋やったの。その机もドレッサーもみんなそやさかい、押入の奥からでも出て来たのと違うやるか」

真理は、自分の情報提供に幸一が熱心に耳を傾けていることが嬉しい様子で、自慢げに幸一を見つめた。

「なるほど。お母さんもこんな物を置いていることすら忘れてはるのかも知れへんなあ」

そう言つて幸一は、窓から吹き入る快風に誘われるように、ふらふらと窓際に近寄った。そうして外の空気で肺を満たしながら自然に星の瞬きに視線を向けた。

「あれ？前の道路、工事してるの？」

工事の赤い表示灯が何列にも並んでいた。

「道路と違うわよ、堤防をきれいにしてはるの」

竹原建設という文字が赤い灯に照らされた。

「人間の意識は不思議やなあ。さっき門から入るときに前を通つた

のに、家に気を取られて全然気づかなかった」

真理も机から離れて秋子のベッドに腰掛けてから、

「昼間やつたらもつと賑やかやし、気づかはるわ」

と言つて、些細なことを面白がる彼の背中を見つめて軽く笑った。

真理も窓からの涼風を心地よく肌に感じた時、突然幸一が振り返つてじつと真理を見つめた。

「どうかした？」

微かに狼狽する真理。幸一はゆつくりと白いジーンズのポケットからパスケースを取り出して、中を開いてじつと見つめた。幸一は自分の発見に興奮して僅かに手が震えてきた。

「ねえ、どうしたん？」

「さっきの縁なしの写真、どこかで見覚えのある写真やと思って記憶を辿っていたんや」

そう言つて、幸一は手にした彼のパスケースを彼女に手渡した。中には一葉の写真が入れてあった。

「ああ、高校の時に幸一さんにあげた写真やね、ずっと持っていてくれはったの？嬉しいわあ。高校一年の時に、秋子と嵐山の渡月橋で撮った写真よ」

嬉しそうに話している真理の目の前に、幸一はモノクロの写真を差し出した。

「やあ偶然やわ、同じ場所で撮ったみたいやわ。母が二十年も前に撮らはった所で私らも撮影したんやわあ。そやけどこれがどうかした？渡月橋ではみんな写真撮らはるし、そんなに不思議やないでしよう？」

「問題は写真の大きさや」

「大きさ？」

幸一も真理の横に腰掛けて、パスケースから中の写真を取り出した。

「ほら、同じ位の大きさ」

幸一のパスケースは、電車の定期券がちょうど入る位の大きさであった。

「本当。そしたら秋子を誘い出した人は、母の写真をパスケースに入れて持ち歩いていたということ？」

「そう、二十年も持っていたら、この位傷むのは当然だろう」

真理は不可解な表情で幸一をじっと見つめながら、彼が次に口にしそうな言葉を恐れているようでもあった。

「そう。俺なら男友達の写真はパスケースに二十年も入れて持ち歩かへん。真理ちゃんはや？」

「普通は、同性の写真は持ち歩かへんわ。家族でも無い限り」

そう言いながら、真理の表情は硬く固まっていった。幸一はそんな彼女を哀れに感じたが、意識は疑問解決に執着してしまっていた。

「まあ、男にせよ女にせよ、お母さんと仲良しでないことは確かやな。少なくとも今は」

幸一はパスケースをジーンズのポケットにしまい込んだ。

「秋子と話しがしたいなら、普通は母を経由して連絡が来るものね。わざわざ写真付きで直接手紙なんか出さなくても」

真理は少し固さを崩したものの、憂鬱な表情を浮かべながら幸一と共に真相を探ろうとした。

「その通り」

幸一は、真理の暗い横顔を心配そうに見つめながら相槌を打った。

「じゃあ、何で秋子は嘘言わはったんやろう？」

「そら、君やお婆さんを心配させたくないからや」

「母に連絡したらあかんでいうのは？」

「お母さんに心配掛けたくないから」

幸一はそう言ったものの、まだ釈然としない、漠然としたわだかまりがあった。彼は真理と並んでベッドに腰掛けたまま、秋子の机をぼんやりと見つめて、自分の頭を整理するかのようにぼつぼつと語り始めた。

「お母さんの知人の男は、ここにあるお母さんの写真と同じ写真を持っていると思われる。その中のお気に入り一枚を二十年間持ち続けていた。そして、何らかの目的で秋子さん呼び出した。その

際に、お母さんを知っていることを示すために、肌身離さず持っていた写真を送ってきた」

と、幸一はテレビドラマの探偵口調で呟いた。

「なかなか鋭い推理ですねえ」

真理は、探偵を気取っている幸一を茶化すようににつこり笑ってから、

「でも探偵さん、その男の人がたくさん写真を持っているとしたら、お気に入りの一枚を送ってくるかしら？ 私なら他の写真を送るけどなあ」

と愛らしい反問を試みた。幸一は彼女が笑顔を浮かべたことに少し安堵した。

「ごもつとも。ということは、その男は昔、お母さんに一枚の写真をもたらったと言うことかな、俺みたい……。つまりその男は、お母さんに想いを寄せていた人、或いは寄せている人」

「嫌やわ、そんなん」

真理は幸一の言葉を受け入れられないようにそっぽを向いた。

「もらった写真とも限らへんなあ」

幸一はもう一つの可能性を思いついた。その男と母が一緒に旅して、男が写したと言う考えであったが、明言する前に彼女の反応を伺った。

「幸一さんみたいに望遠レンズで隠し撮りしはったのかも」

真理は少々不機嫌な声で幸一に言葉を返した。彼は、まだ言い出す時期ではないと考えて推論を引っ込めた。

「そやけど」

何かに気付いたかのように、真理の表情が静かに曇り始めた。

「そやけど？」

幸一は、彼女を興奮させないように優しい瞳で尋ねた。

「その知人がほんまに男の人やったら秋子は……」

幸一は気休めの言葉が見つからずに、ベッドから離れて窓際に歩を進めて星空を見上げた。

「仮にも君のお母さんに想いを寄せていた男やったら、その娘に危害を加えるようなことはないよ、絶対に。それに、危険を感じたら秋子さんは逃げ出したはずや」

窓の外を見ながら放った幸一の苦しい慰めが、虚しく夜空に吸収されて行つた。

「それに、秋子さんを呼び出した知人が一人とは限らへん。写真を送つたのは男でも、今晩は女性も一緒にいるかも知れへん。目的はわからんけど、秋子さんとゆっくり話したいのなら女性がいる方が安心するさかいな」

「星がきれいな」

いつの間にか、真理が幸一の横に並んで、窓から身を乗り出して星を見上げていた。彼女の声が妙に明るくて、澄みきつた夏の夜空に響き渡るようであつた。

「ありがとう」

そう言つて幸一の手を握つた真理に、これ以上空虚な言葉を浴びせるのは止めにした。真理も覚悟を決めた様子であつた。ここで二人があれこれ推察して心配したところで仕方が無い。そんな風に真理が語りかけているような気がした。

「お願いがあるの」

真理はやや落ち着きを取り戻した瞳を幸一に向けた。

「今夜、この家において欲しいの」

少々刺激的な言葉ではあつたが、この状況下では言葉以上の意味は一切頭を過ぎらなかつた。

「もし秋子に何か起きて急に連絡があつたら、うち一人では何もできひんさかい」

「いいよ、喜んで」

幸一がそう答えて微笑んだ時、彼女が静かに幸一の胸に頬を埋めてきた。彼は無言のまま、胸の高鳴りを悟られはしないかと些細を気にしながら彼女の髪を優しく撫でた。

朝陽がカーテンの隙間より漏れ入り、応接間で眠っていた幸一の寝顔を清々しく照らしていた。彼は真理の声で目を覚ました。遠くで聞こえていた彼女の声が足音と共に近づいてくると、ドアの前で一呼吸置いてからノックした。

「どうぞ」

幸一の寝ぼけた声とは対象的に、爽やかな朝風のように真理が舞い込んで来た。

「おはよう。良く眠れた？」

「ああ」

幸一は小さく答えてから眩しげに真理を見上げた時、自分の愚かさにも恥じ入った。明るく幸一に尋ねかけた真理の表情は、一見しただけで睡眠不足であることが伺えたからであつた。

「朝食の用意が出来ているさかい、すぐに来てね」

『秋子さんは？』と問いあぐねている幸一のさえない瞳を見抜いたのか、

「秋子はまだ帰ってないの」

と、真理の方からさらりと言つてのけた。

幸一は居間に通された。畳部屋に、同時に八人は食事出来そうな大きな木製テーブルがあつた。味噌汁の香りと焼魚の香りが旅館の朝食を思い起こさせた。

「いつもこんな贅沢な朝食食べてはるの？」

全部で五品程の惣菜が並んでいた。真理は当然のように頷いてから、

「幸一さんはいつもどんな朝食食べてはるの？」

と、却つて疑問を持たれた。一人暮らしをしていると、まともに朝食を摂ることなどほとんど無い。

「秘密」

そう言つて味噌汁を一口飲んだ。

「美味い」

別段真理にお世辞を言つつもりは無かつたが、自然と言葉が出てしまった。彼女はにこりと笑つてから幸一にお茶を差し出した。

「お婆さんは？」

幸一がだし巻きを頬張ってから尋ねた。

「朝早くに起きて食事しはったけど、また寝たはる。秋子のことは、友達の家遊びに行つたはるて誤魔化しといたわ」

「俺のことは何て説明したの？」

「男友達が遊びに来てるって」

「それで何て？」

「別に……。あまり興味なさそうやった」

幸一は真理の言葉を聞きながら焼き鮭と飯を頬張って、味噌汁を流し込んだ。

「相変わらずせわしい食べ方はるわ」

真理は、昔と変わらない幸一の食べ方を懐かしむような目をして、子供のように黙々と食べる幸一を微笑みながら見ていた。

「食事が済んだら円山公園に行つてみよか？」

幸一の言葉に、真理がはっと胸を突かれたような愛らしい驚きの表情を浮かべて、

「そうやね、秋子とばったり出会うかも知れへんしね」

と、どこまで本気で言っているのかわからない、やや空虚な言葉を吐いた。幸一が濃いお茶を口に運ぶと、苦味を含んだ熱い香りが、まだ半分しか覚醒していない彼の脳裏を刺激した。そしてほっと息を吐いて虚空を見つめた。

彼は複雑な心境に陥った。秋子が今日中に帰って来なかったら、日常生活からかけ離れた『事件』となつて家族を不安の渦中に巻き込んでいくだろう。だが、今日中に帰ってくれば、どんな問題を持ち込まれたとしても、また元のような日常生活の中で徐々に解決されていくような気がした。

「聞くだけ無駄やと思うけど、お母さんの秘密みたいな話とか、怪しい過去の噂なんて何も聞いたことないよなあ？」

幸一は、プライベートな情報なので遠慮気味に尋ねてみた。

「当然。知っていたら秘密やないわ」

真理は笑顔を浮かべて温かいお茶をすすった。

「秋子さんに何らかの情報を渡して特をする人がいるのかなあ。または秋子さんから情報を聞き出したいのか……」

幸一は、覚醒してきた頭に浮かんできた疑問を、ひとり言のように口に出した。

「家族のことを聞き出したいなら、私でも良かったのに。姫路の家の住所は知らないのかしら、その男は」

真理もわりと客観的な口調で推理し始めた。

「もし、男がここの住所しか知らないなら、お母さんがここに住んでいた頃の知り合いで、それ以降は付き合いが途絶えているということになる。そもそもお母さんはこの家にいつ頃までいたはったの？」

「結婚するまで居たらしいわ」

「結婚して家を出て行かかった。と言う事は、秋子さんが子供の頃にこの家で暮らしていたことは無かった。じゃあ、何で秋子さんが今ここに住んでいることがわかったんやろう」

「祖母の知り合い関係かな。秋子と一緒に住むことを祖母が知り合いに話した。その話が回りまわって男の耳に入った。それしか考えられへんわね」

「お祖父さんは？」

「私らが小さいときに亡くならはった」

真理は幸一の瞳を見つめてからお茶を飲み干した。そして、

「そやけど、旅館に泊まり込んでまで何を話してはるのかしら。何か怖い気もするわ」

と言って幸一の湯飲みをちらりと覗いた。

幸一は、真理の自然な疑問に脳裏を針で刺されたような閃きを感じたが、まだ安易に口にすることは自制した。

流石に平日の午前中では、左程多くの観光客はいなかった。二人は四条通りから八坂神社の朱塗の西楼門をくぐると、門外の騒々し

い生業の協奏曲とは打って変って、神木に囲まれてひっそりと落ち着いた冷厳な気に包まれた。

幸一には、全くと言って良いほど興味を起こさせない、小さな祠がたくさんあって難解な漢字が並んでいた。数多の提灯で装飾された鳥居をいくつかくぐり抜けると、祇園造の荘厳な本堂が現われた。祇園造というのは本殿と拝殿が一つの屋根で覆われた珍しい造りである。

参拝の人々がいた。鳩もいた。敷き詰められた小石の隙間を、鳩たちが呆れるほど素早い動作で突いていた。

「御参りしていきましょ」

と、真理が過去に吸い込まれそうな語気で呟いた。

「御参り？」

交錯した二人の視線は、同時に過去の記憶へと散っていった。二人の最初のデートは、書写山という標高四百メートル程度の小山の頂にある、天台宗円教寺への初詣であった。そして、二人が最後の時間を過ごしたのも同じ場所であった。あれから二年の月日を経た二人が再び神仏を参詣して、ここから何かが始まるかのようであった。「そう言えば、幸一さんは御参りするのが嫌いだったわね」

初めてのデートだというのに、幸一は神仏に手を合わせるのが嫌いで、真理が詣でている姿をじっと見ていた。そのことを思い出した真理は爽やかな笑顔だけを置き去りにして、一人ですたすたと歩いて行った。幸一も静かに彼女の後に続いた。

「最近は何も御参りするようになつた。京都にはたくさんのお寺や神社があるのに、御参りしなかったら罰が当たるさかい」

真理は軽く幸一を見上げて、本当に神仏を敬う気持ちができただのか、それとも何でも女子に合わせる軟派な男になってしまったのかを探るように、清潔な笑いを浮かべて幸一の瞳の奥を覗いた。

「いつも、どんなことをお願いしてるの？」

真理は玉砂利の音を立てないように、俯いたまま小さな歩幅で歩んで行った。

「この世から、ありとあらゆる災害や人災が無くなって、人類すべてが平和に暮らせますように……」

そう言つて、幸一はふと空を見上げた。今日も一日暑くなることを、背に感じる強烈な日射しで予感しながらも、青空を美しいと思つた。「ほんまに？ 誰かさんと仲良くなれますようにとか、お願いしてはるでしょ、ほんまは」

「たまにはね、真理ちゃんともう一度仲良くなれますように、とか……」

真理は軽く笑つてポシェットの中を探り始めた。幸一はその一瞬の美しい恥じらいを目に捉えながら、初詣の夜もそうしたように、ポケットから小銭を一掴み取りだして彼女に差し出した。真理もまた、あの夜のように小首を傾げて彼の瞳を伺ながら、百円玉をつまんだ。二人は拝殿に立つて厳肅に合掌した。

「なんてお願いしたの？」

幸一は、わかつているのに敢えて尋ねてみた。

「勿論、早く秋子が帰りますように、て。幸一さんは？」

「一刻も早く秋子さんを見つけ出して見せます」

幸一の言葉を聞くと、真理は口元に笑みを浮かべただけで、黙したまま静かに拝殿から離れて歩き始めた。

「どうかした？」

幸一もゆつくりと玉砂利を踏みながら彼女の横顔を覗き込んだ。

「何でもないの、おおきに」

そう言つた瞬間、鳩たちが群れを成して舞い上がり、その嵐のような羽根音に周囲のすべての音が飲み込まれて、すべての動きが停止したかのような錯覚に陥つた。

二人は八坂神社を抜けて円山公園へ進んだ。そして花の無い桜並木の下を歩いた。

「春はきれいでしょうねえ」

真理は青葉しか付いていない枝を見上げて、その隙間を群青色で敷

き詰めている夏空に嘆息を投げ掛けた。

満開の桜を想像した感嘆の嘆息なのか、現在の不安から零れ落ちた溜息なのか、幸一には推し測れなかった。

春には円山公園の中心となる枝垂れ桜の大木や、幕末志士のモメントを眺め、幕末の頃から営業しているという御茶屋で一休みした。

「まあ、ざっとこんな所ですけど、円山公園は」

幸一は、今日初めてのコーヒを味わいながら真理の瞳を見つめた。

「知ってるわよ、家族で夜桜を見に来たことがあるさかい」

「なんや。はよ言ってくれよ」

「でも、幸一さんの案内は参考になるわ」

「何の参考？」

「観光客が喜びそうなポイントを押さえてはる。多分、たくさんの女の子を案内しはったんでしょね」

そう言つて真理は紅茶を口に運びながら、上目使いに幸一の瞳をからかう風に覗きこんだ。

「……」

「ほんま、昔から幸一さんはわかりやすいわ」

そう言つて、今度は手を口に当ててくすつと笑った。

幸一は、昔から自分を子供扱いする真理の態度にどう反応すれば良いのか困惑することが多いが、やはり苦笑するしか術は無かった。「これからどっちへ行く？」

幸一は分の悪い状況から速く脱したかった。

「清水の方へ行つてみたいわ」

真理は軽く語尾を上げて、紅茶を飲み干した。

茶屋を出た二人は円山音楽堂の横を抜けて、趣のある石畳の町並みを通り抜けた。高台寺へ通じる、青葉のトンネルのような階段を、少しの間立ち止まって見上げてから、産寧坂まで歩いてきた。

「清水も来たことがあるの？」

幸一の問に真理は小さくかぶりを振った。円山公園でもそうであつ

たが、彼女は周囲の風景や店には興味を示さず、行き交う若い女性を全員確認するくらいの集中力で、眼球が迅速な動きをしていた。産寧坂を上り、清水寺への長い参道を上り詰めると、幾筋もの汗が背中を流れた。強い日射しが、嫌がらせのようにじりじりと照り付けて来た。

清水寺の舞台からの眺めは絶景であつた。青葉と日向と日影がくつきりと境界線を描いた盛夏の風景であつた。二人は舞台の手摺に並んで身をもたげながら、まばゆい風景を全身で吸い込んだ。

「ここから見える街のどこかに秋子はいるのかなあ」

そんな、真理の吐息のような言葉を聞いた幸一は、秋子がすぐに帰つて来ないと真理も感じているのではないかと思つたが、彼女の不安を吸収するように、優しい気持ちだけを胸いっぱい湛えた。

「ごめんね、秋子のことばかり考えていて。折角、幸一さんが側にいたはるのに」

と、真理が申し訳なさそうに謝つた。彼は小さく首を振つて、

「俺も秋子さんのことばかり考えていたよ……」

と、笑顔を浮かべた。

「でもわかつていたことやけど、ここへ来てみても秋子とは会えへんかつたし、手掛かりも無かつたわね」

真理は、幸一に笑顔を返してから音羽山の方をぼんやりと眺めた。

幸一は真理の作り笑顔が悲しくて、

「そんなことあらへん。ここへ来たお陰で、あることがわかりかけてきた」

と、ほんの些細な気付きを大袈裟に表してしまった。

「あること……。て？」

真理の瞳が鋭く輝いて幸一を振り返つた。彼は音羽の滝に視線を落とした。

「まだ確信はない。家に帰ったら確かめるよ」

幸一はそう力強く言つたものの、さしたる発見は無かつた。ただ、秋子の机から出てきた多くの写真の中に、清水寺で撮つた物があつ

たような気がしただけである。それだけであつた。不安と落胆に見舞われているにも関わらず、健気に作り笑顔を浮かべる真理に少しでも希望を与えたくて、少しでも安堵させたくて、確証も無いことをつい口にしてしまったのだつた。

太陽が益々高く上り始め、大地を照りつけている。幸一は左の手首で額の汗を拭ったが、真理は全く無表情であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8235x/>

モノクロームな風景

2011年11月20日11時33分発行